

広島の公共彫刻——「彫刻のあるまちづくり」を中心に

The public sculpture in Hiroshima – a study
based mainly on “the town planning with
sculptures “policy

生活文化専攻

コジエ kojie

目次

はじめに	3
第1章 日本の野外彫刻	4
第1節 明治～平成期の野外彫刻	5
1. 戦前・戦中・終戦—銅像について	5
2. 1960年代の「彫刻のあるまちづくり」	6
3. 1980年代のパブリックアート	7
4. 1990年代のパブリックアート	7
5. 2000年代のパブリックアート	8
第2節 野外彫刻によるまちづくりの先駆—宇部市の場合	9
第2章 広島市街地のモニュメント	15
第1節 広島歴史	16
1. 広島歴史	16
2. 原爆被害そして復興	17
第2節 広島市内のモニュメント	18
1. 慰霊碑と平和祈念碑の相違点—能動的に「平和」を伝える	18
2. 平和祈念碑の特徴	28
3. 設置されている場所	29
4. 「彫刻」に分類される碑やモニュメント	30
5. 「工芸」に分類される碑やモニュメント	41
6. 「建築」に分類される碑やモニュメント	45
第3章 広島における彫刻設置	51
1. 広島における現状	52
2. 広島方式の設定	54
3. 広島典型的な公共空間	59

4. 広島「彫刻のあるまちづくり」の9点作品	63
おわりに	78
注	79
参考文献	80
図リスト	83

はじめに

人間の歴史はさまざまな記念碑¹やモニュメント²を建立し設置してきた。現在数多くの野外彫刻が設置されており、街中に彫刻を設置することはめずらしくではない、日本には日常的であたりまえのことになっている。

現在推進されている設置事業は大部分が美術作品としての野外彫刻を設置しているが、こうした事業が初めてされたのは戦後のことだ。

野外彫刻は公共空間の構成要素の一つとなっている。これらの公共空間に設置される野外彫刻は、近年「パブリックアート」³と呼ばれる場合もある。本研究における公共空間とは、広場や公園、街路といった誰もが自由往来にできる場所のことをいう。

人類史上最初の原子爆弾がアメリカによって広島に投下された。被爆当時、約 14 万人⁴の市民や軍人が殺されたヒロシマ。この人類史上に初めての苦しみと悲しみが、200 基に近いモニュメントをつくりあげた。

碑や像や塔など、さまざまな形の原爆モニュメントにはそれぞれ名前がつけられている。原爆が投下された 1945 年から今日まで、毎年のようにモニュメントは建立されている。

本研究は野外彫刻が設置された明治時代以降、現在に至るまでの野外彫刻の内容や目的、場所との意味的つながり、設置方法（場所、位置など）を分析し、これらがどのように発展、変化してきているかを確認をすることを目的とする。

第 1 章は「日本の野外彫刻」、第 2 章は「広島の野外彫刻」の事例からまず一般的な野外彫刻を研究する。その上で第 3 章では広島によって実施された「彫刻のあるまちづくり」政策について検討する。広島のもニュメントはその後の日本の野外彫刻とその設置事業にどのような展覧をもたらしたのだろうか。

21 世紀を迎え、心豊かな都市を未来に渡せるよう、そのかたちを模索していくことが本研究の目的である。

第 1 章

日本の野外彫刻

1. 明治～平成期の野外彫刻

(1)戦前・戦中・終戦—銅像について

日本では、都市の公共空間に美術作品を設置する動きは、各地のモニュメントの設置事業が盛んになった 1950 年前後に始まった。1960 年代以降は、宇部市の野外彫刻展などが全国的な広がりを見せるようになった。1980 年代後半から 90 年代の初めにかけて、彫刻を中心とする作品の数が増加していた。この時期になって、これらの公共的な作品は「パブリックアート」という外来語がよく使われるようになる。しかし、アートがまちに出現したのはもっと古く、明治時代だった。戦前の設置事業の対象は、人物の彫刻で、高い台座を伴い設置されていた銅像といわゆる。歴史上の人物、戦争などでの功労者、軍人、政治家、文化人などを表現するモニュメントとして明確な性格をもつ。作品や設置形態は欧米の影響を強く受けている。

第二次大戦中の1943年、政府は全国の銅像などの回収することになった、ただし、皇室や皇族に関するものや特に国民の尊敬の人物のものなどを除いた。銅像はものとしてあるのではなく、モデルとなった人物そのものであったのだ。これらの銅像は台座とともに設置されている。

たとえば、大蔵大臣などをつとめた。早速整璜(はやみ・せいじ)像、首相となった加藤友三郎像などは高い台座だけが比治山公園に残っている。台座は銅像に高さを与え、銅像は高さをもつことによって、人々に自ずと仰ぎ見ることを要求する。そして、人々は銅像を仰ぎ見ることを通して、崇敬すべき対象であることを認識させられていく。銅像の場合、人々とアートとのかかわり方は、このような形で規制されていった。

戦後は戦前の銅像を撤去・破壊・移設が行われていて時期だった。新しい設置事業はほとんどなかった。しかし、1940 年代末から徐々に再開される。当初の銅像は再制作して再建する事業が主流であった。新しい銅像が、地域のある歴史上の人物、文化人等がその対

象になっている。

銅像の設置は現在も行われており、先に挙げた加藤友三郎銅像はその一つである。広島出身の加藤友三郎は 1861 年広島生まれ、1873 年に海軍兵学寮に入学、日清戦争・日露戦争に従軍した後、呉海軍鎮守府司令長官、第一艦隊司令長官などを歴任した。1922 年広島出身初の内閣総理大臣となったが、1923 年に逝去した。1935 年に比治山に銅像ができたが、1943 年に金属回収令により、銅像は撤去された。以来、比治山には銅像の台座だけが残っているが、2008 年に中央公園に銅像が完成した。

戦後になり、国家主義に代わり、自由や平和、希望、愛といったものを大切にする価値観が共通のものになると、銅像の内容も若い男女の裸像や母子像などにかわる。

こうした作品には特定のモデルはいない。むしろどこにでもこどもをやさしく抱く母親の姿が象徴していた。この時期に設置された彫刻作品は、「平和」「自由」「母子」などというような題名をもち、銅像と同じようなブロンズ像を素材とする人物像で、男女の裸像や母子像が多い。これらはテーマは人間にとって人体の美を強調する必要のある概念であった。広島の代表的な事例として「嵐の中の母子像」「祈りの像」などがある。

1950 年代は「平和」である。平和を記念する母子像はこの時期から全国に広がり、現在でも設置が行われる日本特有のモニュメントとなった。近年は自治体の非核平和都市宣言などに伴い設置されることが多い。

1950 年代における設置事業では以上のように銅像との人物や、人体の美しさを表現する彫刻が登場したことだ。ただし、これら一般には美術作品として捉えられていたわけではない。健康な人体が、社会的に「平和」「自由」などという概念や社会的に記念すべき概念と結びついていて、美術作品であることは 1960 年代の宇部市以降の事業で強調されるようになった。

それでは、なぜ 1950 年代に裸像が「平和」「自由」というようなモニュメントが都市空間に現れたのか。当時の彫刻家に裸像を制作する作家が多かったことが原因のひとつとして指摘できるが、着衣の像を依頼することは十分に可能であったはずだ。裸像は西洋的で進歩的と感じられたのかもしれない。

(2) 1960 年代の「彫刻のあるまちづくり」

まちづくりとアートの関係において最初に語られるのは、行政主導による「彫刻のあるまちづくり」への取り組みである。その歴史は古く 1960 年代にまで遡る。60 年代は、日本

高度経済成長期であった。道路、住宅などの施設の整備が急に進み、量的充足が求められていた時期に当たる。量的には多かった、質に目を向けさせるきっかけとなったのが、公共空間に彫刻を配置するという「彫刻のあるまちづくり」への取り組みである。

1961年に山口県宇部市において最初の野外彫刻展を開催された、その以降は神戸市や仙台市などでも同じに取り組みが広がっていった。これらの取り組みは、都市にうるおいをもたらすといった意味をもつ。

この「彫刻のあるまちづくり」における、まちづくりとアートとの関係をみたい。まず展示される場所であるが、まちの中心市街地となる商業空間、都市公園、公共施設・文化施設などがその主な対象となっている。そして、展示される作品は、著名な作家の作品が好まれ、美術界と距離が近い状態にあった。

1961年から宇部市、68年から神戸市が彫刻設置事業を開始する中で、1970年代初頭北海道の諸都市で独立の設置事業が開始される。札幌市は1972年の冬オリンピックの影響で開催前後の期間に設置を実施行った。70年代は各市の設置事業が開始され、パブリックアートの形は変わっていない。

(3) 1980年代のパブリックアート

この時期始まった事業は多い。1982年の「広島市彫刻のあるまちづくり基本構想」、1983年の「福岡市彫刻のあるまちづくり計画調査」などがあつた。

作品内容に対する明確な方向性を持たずにスタートした設置事業は、寄贈作品を安易に受け入れてしまう、地元作家を優先であった。また、この時期多くの事業における作品入手の方法は、既製作品の購入、仙台型の特定の設置場所に対するオーダーメイド方式、寄贈作品の受け入れが主流で、八王子型の彫刻シンポジウム開催による作品入手は1979年から1983年にかけて松阪市、1983年に川崎市が行った程度で少なく、宇部・神戸型の野外彫刻展開催による作品入手は見られなかった。

(4) 1990年代のパブリックアート

90年代ではさらに絵画やストリートファニチャー、あるいは空間自体（音や光などを含むインスタレーション）にも広がっている。

90年代の日本はバブル経済によって建築ブームという考え方が一時取り入れられ、必ずアートを設置することがステイタスのように考えられた。

「行政による「彫刻のあるまちづくり」」の時代は、パブリックアートにコンセンサスを与える「権威」が必要であったが、パブリックアートの浸透と共にその必要性は薄れ、むしろ、開発事業者として、都市間競争を優位に展開し、街のブランディングを図る手法として、パブリックアートが注目されるようになる。

そこでは、形式的なコンセンサスよりも、まち・都市空間のオリジナリティやテーマ性が求められることとなり、その役割を担う存在として、アートディレクターが起用されることになる。アートディレクターは、そのまちにおけるパブリックアートのあり方・コンセプトを策定し、そして、アーティスト、作品をまちに配し、まちづくりに一定の方向性を与えることになる。これは、単にパブリックアートが設置された作品そのものが評価されるものではなく、作品を含む都市空間を総体として創造する取り組みと理解することができ、パブリックアートの進化形として、前時代とは明らかに区分される。

この流れをつくった契機とされるのが、1994年にまち開きを迎えた「ファーレ立川」である。「ファーレ立川」⁵は、住宅都市整備公団（現・独立行政法人都市再生機構）が手がける大型再開発プロジェクトであるが、この街には、いたる所にパブリックアートが配置されている。

そして、その作品は、見ると見られるとの関係を超越し、人々とアートとの多様な関係が想定されており、これまでのパブリックアートとは異なる作品性を感じることができる。以降、都市開発の分野において、アートは開発言語の一つとして多様な展開を示すことになる。

(5) 2000年代のパブリックアート

2000年代半ばはアートがまちなかでの意味を獲得していくプロセスにおいて、必然的にアーティストや実行委員は、まちやそこにいる人たちとの関わりを深めていく。見方によっては、アートプロジェクトの実施が、アートを介したコミュニティづくりになっているとも考えられる。

まちづくりの側面から考えると、まちをつかったアートプロジェクトがコミュニティづくりや、地域の活性化につながるという視点が全国的に持たれ始めた時期ではないだろうか。

2004年から指定管理者制度による遊休公共施設のアートセンター化。市民・NPOセクターによるまちづくりの取り組みで大きなターニングポイントとなったのは、1998年に施

行された「特定非営利活動促進法（NPO法）」と2003年にスタートした「指定管理者制度」である。この二つのシステムが稼働したことで、市民・NPOセクターによるまちづくりは、より主体性、創造性が加わった取り組みへと進化することとなった。

この潮流は、まちづくりとアートに関係においても、新たな取り組みを促すこととなった。それは、廃校となった小中学や歴史的建築物等を、アートをテーマとするNPO法人等が指定管理者となり、「アート」には日常を豊かにするパワーがあり、アートを軸に新たな価値や楽しみを創造することで、そのまち・都市に暮らす意味や必然性がより一層明確化される。

これは、これまでのパラダイムでははかり得なかった、転換の端緒を開く意義あるものと評価することができるのではないだろうか。もう少し端的に言うと、「経済で解けないならば、アート・文化で解く」。

2008年からアートプロジェクトの全盛期。数年のうちに、全国各地でかなりの数のアートプロジェクトが展開されるようになった。開催地域の特性も多様、実施主体も市民団体をはじめ行政、大学関係者、地元企業と様々である。作品のあり方も従来のモノを空間に出現させるだけではなく、パフォーマンスをする、鑑賞者とのコミュニケーションそのものを作品とするようなものも出てきている。この背景の一つに、アートプロジェクトの実施基盤が醸成されつつあることが考えられる。

2. 野外彫刻によるまちづくりの先駆—宇部市の場合

日本における彫刻設置事業は 1961 年、宇部市において始まった。宇部市は山口県南西部、瀬戸内海に面する人口 17 万人の工業都市である。1945 年第 2 次世界大戦の末期、米軍の空襲によって市街地の大半を焼失してしまった。

石炭・化学工業の都市・宇部市は、戦後の急速な工業化に伴う大気公害によって「日本の灰の町」と称されていた。大気汚染によって町の自然環境は破壊され、多くの人々が気管支炎や喘息などの呼吸器系の病気に苦しめられていたのが、また、暴力団体の喧嘩があったのが、これは昭和 20 年代の宇部市だったのである。

そうした社会問題を解決するための手段として、1955 年に婦人団体による「宇部を花で埋める会」が結成され、「花いっぱい運動」が開始された。戦後の「緑と花のまちづくり」に続く「まちを彫刻で飾る運動」を具体化する方法として開催された。現在、全国の数多

くの都市で行われている彫刻設置事業の先鞭をつけたものである。

宇部市の「まちを彫刻で飾る運動」は、1960 年、宇部市女性問題対策審議会は市に「まちを彫刻で飾る運動」の実現を提言した。街を花で満たし、緑の多い住みよい環境をめざす市民運動である。この運動の役を果たしたのは、市の教育委員・女性問題対策審議会委員を務めていた上田芳江で、暴力団体の喧嘩場になっている場所に花壇を作り、花を植えることから始めた。「喧嘩のできないまちづくり」を目指して花を植える、という発想である。この花いっぱい運動と、市の公園緑地課とは互いに協力、それぞれ緑化活動を進めていたが、1958 年、花いっぱい運動で集められた基金の一部を利用して、公園緑地課が『ゆあみする女』のレプリカを購入、宇部新川駅前広場の噴水池に設置したところ、それが市民の間で大きな評判となった。

ところがまもなく、『ゆあみする女』の像が市民に告知されることもなく、公園緑地課の一存で別の場所へ移設されたことが、花いっぱい運動の婦人団体と市との間で議論になった。その議論が発展するうちに、手軽なレプリカを安易に設置するのではなく、芸術性の高い立派な彫刻を市に置こうという機運が高まり、1961 年「宇部を彫刻で飾る事業の事務局」が発足し、「宇部を彫刻で飾る運動」につながったのである。⁶

つまり、宇部の彫刻の原点にあったのは、「荒廃した街に人間性を取り戻したい」という切実な願いであった。そこで「花や緑」と「彫刻」は、街にうるおいや人間性、文化性をもたらしてくれるものとして、市民から大きな期待をかけられていた資源だった。宇部市の場合、花いっぱい運動と彫刻運動とは、ともに文化的な理想のまちを作るための運動として相互に不可分の関係にあったといえる。

そのように、環境政策の一環として開始した宇部の彫刻運動は、今度は都市の文化政策的な方向へと移行してゆく。宇部市は、市を彫刻の街とすることをめざし、その始まりとして市内で野外彫刻展を開催することをした。その結果、当時の星出寿雄市長や市立図書館長の岩城次郎らの尽力により、彫刻家・向井良吉、鎌倉近代美術館館長・土方定一らの理解と協力が得られ、1958 年から鎌倉近代美術館で開かれていた野外彫刻展が、宇部で移動開催することが決定する。鎌倉近代美術館の野外彫刻展と言えば、戦後日本の野外彫刻展としても、その最初期に位置する場所である。このような経緯で、1961 年に宇部で開催されたのが、「宇部市野外彫刻展」であった。前年に鎌倉近代美術館で行われた「集団 60 野外彫刻展」のメンバーを中心に出品され、外国人作家を含む若手作家 16 名の 60 点余りの彫刻作品が、野趣溢れる常磐公園の中に展示された⁷。常磐公園は、市が 1956 年に計画

した緑地公園造成計画の一環によるもので、宇部市における緑化運動と彫刻運動との深い結びつきをここにも見ることができる。

「美術館が不気味な密室のようにさえ思われてくる。密室—しかしそれは巨大なエネルギーを秘めたものには思われない。なにかヌラヌラとして、居心地の悪い密室である」

「湿っぽく淀んだ館内の空気は、作品にはソッポをむいて、ものうく居眠りを続けている。作品の呼びかけに、答えようとはしない。（略）この会場のなかだけで飼いならされていったとしたら…きつと、ぼくは萎えて、しぼんで、ひからびてしまうのではないだろうか。そんな疑いと恐れにおののいていた矢先に、渡りに船の話がやつてきた」⁸

向井は彫刻家の立場から「脱美術館」の立場に立ち、美術館の限界や弊害を乗り越える形で、都市空間への彫刻進出を希求していた。宇部の彫刻の立役者の一人である岩城次郎が「従来、美術展において絵画の部の附録的な観として伝襲化されていた彫刻」⁹とまさに表現しているように、芸術のジャンルとして、彫刻は長らく絵画に比して二次的な位置づけに置かれてきており、彫刻作品の発表・流通の場、教育システムの規模や充実度なども、絵画のそれに比べて格段に小さなものであり続けてきた。近代以降の日本の彫刻はその成立時から、彫刻家たちが存在し作品を生み出しているにも関わらず仕事の依頼もほとんどなければ、作品を発表する場や設置する場も非常に限られたものしかないという、構造的問題を抱えていたのである。当時の美術館や画廊だけでは、彫刻作品は明らかに行き場のない状態となっていたのだ。

その時、彫刻が都市空間へ進出するという動きは、彫刻の社会的な位置づけを高め、彫刻の行き場を開拓し、彫刻が社会の至る所に継続的に存在し続けるシステムを構築するためには、絶好の戦略であった。これまで美術館や画廊に展示される機会が少なく、例えば展示されたとしても、向井が狭い空間に押し込められるような状態から、青空の下の広大な野外環境の中に彫刻が解放されることは、当時の彫刻家たちにとっては願ってもないところだっただろう。

このように、都市環境の改善を望む市民による「都市に彫刻を」という願いと、美術館からの脱却をはかる芸術家による「彫刻を都市に」という二つの願いは、全く逆方向を描きながらも、見事にその利害を一致させたのである。それでは、美術館の側はこのような動きに対して抵抗の意を示したのかというと、そうではないばかりか、鎌倉近代美術館館長の土方定一が、自らの美術館における野外彫刻展と宇部での野外彫刻展の開催に大きな力を尽くしたように、むしろ積極的にこの潮流を受け入れ支持した。なぜなら、鎌倉近代

美術館側から見たときに、宇部の野外彫刻展が「移動開催展」であるという位置づけに端的に表れているように、美術館にとっての野外彫刻（展）とは、美術館を都市空間にまで拡張することを意味するからである。それは、単に物理的に展示のための空間が拡大されるといったレベルに留まるものではなく、彫刻をはじめとする芸術作品が都市空間に進出し、社会における芸術の重要性が飛躍的に高まることによって、芸術の公共性を司る美術館の社会的な存在意義や価値の拡張につながる、という本質的な意味においてである。

このように宇部市の彫刻設置運動は、野外彫刻展という形式を取り入れることによって、市民・行政・芸術家・美術館の利害が一致し、互いに連携する方向性を獲得した。宇部興産という地元の有力企業による支援—タンカーで作品を無償運搬するなど、現在でいう企業メセナの走り—があったことも、野外彫刻展を支えた大きな要素だっただろう¹⁰。

宇部の彫刻は、さらに新たな展開を見せる。1961年の宇部市野外彫刻展は、1963年の「全国彫刻コンクール応募展」を経て、1965年「現代日本彫刻展」の開催に至り、以後今日まで40年以上にわたって隔年開催を継続している。そして、現代日本彫刻展における入賞作品を宇部市が買い上げ、市内随所に恒久設置するシステムを整備したのである。この宇部市の画期的な試みによって、それまで別個のものだった期間限定の「野外彫刻展」と、作品を恒久設置する「彫刻設置事業」とが結び付けられるようになった。

このシステムはまた、宇部市と彫刻家との各自利害を、より一層巧みに一致させることに成功した。それまで彫刻の世界には作品発表の機会や市場が非常に貧弱であったことは先述した通りだが、野外彫刻展に彫刻設置事業が結びつくことで、彫刻家にとっては作品の発表場所と買取先を同時に確保することができるようになったのだ。一方宇部市としては、コンクールを開催することにより彫刻作品を比較的簡単な方法で、安価で大量に入手することができる。そこで竹田直樹が指摘しているように、宇部市の初期の買取価格は作品の制作費にも満たないような金額であり、「ぶん取り賞」と言われていたにも関わらず、彫刻家は野外彫刻展や設置事業を大いに歓迎し、ここに双方の思惑が一致したのである¹¹。

この宇部市の事業が原点となって、日本の彫刻設置事業はその後発展していったと言えるだろう。地方自治体が、その時々を記念すべき出来事に合わせたモニュメントではなく、継続的・計画的に街中に作品を設置する事業を始めたのは、まさに宇部市の彫刻設置事業を端緒としている。そして本格的な設置事業の始まりは、彫刻が社会の中で市民権を拡大し、自らの存在場所をより一層開拓していく運動の始まりでもあった。

宇部市は、現在、300点を超える彫刻を展示している。最初の野外彫刻は、サイズも素

材も屋内の彫刻を野外へ持ち出したような作品が多い。1970 年ごろになると、大阪万博が開催されるなど高度経済成長期だった、工業の新素材と野外彫刻をテーマに展覧会が開催された。1970 年代以降、耐久性のある素材が主流を占め、野外彫刻の概念が定着していく。時代の関心は彫刻の造形的な面だけでなく、彫刻と野外環境との関係へと移行し、近年、彫刻と鑑賞者の関係も重視されるようになっていく。

展覧会で受賞した作品は後に、市内各所に展示される。野外彫刻では、周囲の景観や都市機能との調和が重視されるため、作品と場所の特性とを考えして設置場所が決められる。

常盤公園のような自然環境豊かな広い公園では、様々な傾向の彫刻の展示が可能となるため、実験的な作品が多く展示される。

2000 年には新たに、彫刻移設・ライトアップ事業として、市街地の彫刻 22 点を実施した。さらに、2003 年にはライトアップ彫刻の鑑賞ツアーや写真コンテストを実施している。

これまで宇部市野外彫刻成功の要因は、宇部の「町を彫刻で飾る運動」に端を発した「現代日本彫刻展」は、昭和 20 年代から続けられた日比谷公園での野外創作彫刻展など、都市が自らのために行った事業が、全国に影響を与えた意義は大きいものがある。①戦後の市民生活の中から、健康や教育といった生活実感を基盤とする「緑と花のまちづくり」に運動していたこと。また進める人材にめぐまれていたこと。②明治以来の宇部独立の気風と教育熱心な風土性。③「企業も市民」という発想にもとづく市民と行政と企業の協力。宇部方式と言われるもの。④常盤公園があった。

設置事業の基本システムは、①全国公募を実施する。②参加者は模型を制作し応募する。③模型を審査する。④入選者は実物大の作品を制作し常盤公園に搬入設置する。⑤野外彫刻展として一般に公開する。⑥実物大の作品を審査し各種の賞を買取賞として与える。⑦買取賞として取得した作品を適切な設置場所に恒久設置するというものである。したがった、設置対象となる作品は、純粋な美術作品として製作。

以上のように、宇部市の彫刻設置事業は生活環境を改善しようとする努力の中で緑化事業が変質して始まった。環境整備あるいは景観形成を目的とした、これまでにない全く新しいタイプの設置事業の始まりとなった。

以上、現代日本彫刻展に宇部の彫刻設置事業の概略についてまとめたが、いくつかの問題点があった。まず作品の大きさによって、作家の製作費など経費の経済的負担を重いものになっていることが指摘できる。

また宇部の場合、事業を始めて以来 30 年多くの作家の協力によって今日に至っている

が、人口 20 万人にみたない地方都市にとっては準備、輸送、設置などの経費の負担は重いものがある。

作家の過大な負担の軽減を図ることとあわせて、大きな、しかしなかなか解決のつかない課題といえる。

また、作品の管理日常的な課題である。管理保存は芸術は永遠という考えるすれば重要である。素材とのかかわりや、保全にかかる経済的負担や管理システムを含めて、これからの大きな課題であろう。

第2章

広島のもニュメント

1. 広島 of 歴史

(1) 広島 of 歴史

広島には 1873 年、「広島鎮台（後の第五鎮台）」が置かれており、広島から派遣された兵員が西日本の反政府蜂起の鎮圧に従事したこともあった。しかし日清戦争時には、広島駅や宇品港を持つ場所の軍事上の重要性がさらに強く認識されることになった。1894 年から翌年にかけての日清戦争にあたっては、天皇が広島に来て陣頭指揮をとることになり、広島が「臨時首都」となって「大本営」が移され、帝国議会も広島で開催された。現在の広島市の水道施設は、この時に天皇勅令で作られた軍用水道から始まっている。

千田は、日清戦争時に、宇品築港の功績が称えられて勲三等旭日授章を授与された。さらに軍事施設や軍用鉄道が次々と充実し、広島が「軍都」として発展していくにしたがって、広島市議会は千田元知事に 3000 円を贈ることを決議した。

その後も、義和団事件の鎮圧部隊などが、広島を通過して、大陸に派兵されていった。日露戦争の際には、広島市は数万の陸軍将兵と軍馬の集結地となり、さらに兵站基地にもなった。その後も第一次世界大戦などをへて軍事施設は充実し、人口も飛躍的に増大し、近代化が大きく進められていった。第二次世界大戦中も広島 of 重工業はさらに発展し、戦争末期には「本土決戦」に備えた「第二総軍司令部」および行政的にも「中国総監府」がおかれ、広島は国家総動員の軍事態勢の下で、西日本の中心として位置付けられた。このように 1945 年までの広島は、重要な陸軍施設、中四国地方随一の軍港、三菱造船所などの巨大な軍需産業施設が存在する、まぎれもない「軍都」であった。また宇品港の沖合にある江田島には幹部士官を養成する海軍兵学校があり、広島から 20 キロ余りの場所に隣接する呉市もまた軍港や海軍工廠で知られ、日本帝国海軍の技術の結晶であった巨大戦艦大和が建造されたのも、呉であった。

結局広島では、軍事に偏った重工業地域と、農村部の貧困が並存する、いびつな経済構造が進んでいくことになる。明治初期の広島では、「労働力が米作の三倍かかる」といわれる綿栽培が盛んであったが、中国産などから安い綿が輸入されるようになると、綿栽培

は衰退していった。もともと全国で二番目に一人当たりの農地が少ないという農村部の実情もあって、労働力が大幅に余ったため、やがて広島は、日本で一番海外移住者が多い県として知られるようになる。ハワイやアメリカ西海岸地域では、日本人移民の話す標準的日本語は、広島弁であると言われるほどであった。アメリカで 1924 年に「排日移民法」ができると、広島からの移民たちはブラジル、あるいは日本帝国植民地である台湾・朝鮮・中国東北地区（旧満州）などへ、官吏・教員・商人として移住していった。¹²

(2) 原爆被害そして復興

1945 年 8 月 6 日の原爆投下は、「直接被害」だけでも、約 14 万人を死に至らしめたと言われるものであった。広島市の中心部は爆発とその後の火災によって、壊滅的な打撃を受けた。爆心地から半径 500m の範囲内は瞬間的に消滅、市街地の 92%が被災し、40%が廃墟と化した。

1946 年に広島市が初めて GHQ¹³に復興援助を求めた際、マッカーサー¹⁴は「もしこのような要求を認めると、何十もある他の戦争被災都市からも同じような要請が出る」との理由で、要請を拒絶した。しかし 1949 年に再び GHQ に陳情する際、浜井市長¹⁵は、物質的・技術的援助ではなく、「平和都市」という考え方の承認を求め、「広島平和都市法案」草案の承認を要請した。すると今度は、マッカーサーは、躊躇なくこの案に賛同した。冷戦がすでに始まっていた時代にあって、「広島」や「平和」に関するものは、極めて政治的な含意を持っていた。

しかしあえてマッカーサーは、「広島を平和記念都市にする」という考え方に、支持を示した。おそらく広島を怨恨の被爆都市にせず、平和都市として再建させるという方向性は、原爆投下に一抹の良心の呵責を感じていた多くのアメリカ人の立場からしても、望ましいことだったのだろう。

浜井市長らは、広島を「国際的な平和の記念都市」とすることの意義を国会議員などに訴え、その世界史的意義と国家的意義を強調した上で、広島を「新時代のジュネーブ」というべき国際的観光都市とする抱負を語った。1949 年には国会で、「広島平和記念都市建設法」が一致で可決された。地域特別法であったが、広島市民による住民投票が行われ、投票者の 90%以上の支持を集めて、この「建設法」は正式に成立した。

この法律が画期的な意味を持ったのは、これによって復興の財源確保策として、旧軍用地の無償払い下げを行うことが可能になったからである。かつての軍都広島には、戦後は

使い道のない旧軍用地が中心部に多数存在していた。またこれに加え「建設法」によって、国家予算を使つての支援も促進されることになった。

「広島平和記念都市建設法」は、第一条において「恒久の平和を誠実に実現しようとする理想の象徴として、広島市を平和記念都市として建設することを目的とする」と謳っている。浜井市長のリーダーシップで追求したこの理念こそが、「建設法」制定の大きな要因であった。

浜井が観光都市としての可能性を強調した背景には、単に戦前の状態を復活させることでは復興は実現できない、という状況認識があった。占領軍は、すでに 1945 年 9 月の段階で、軍需施設用物資・兵器・艦艇・航空機の生産停止、戦力となる特定産業や生産諸部門の廃止を命令していた。もはや戦後の日本に「軍都」は復活し得えず、広島は、新たな理念に基づく、新たな産業基盤が必要としていた。

2. 広島市内のモニュメント

調査の結果は次の通りである。広島のモニュメントは都心部に近いものを調査した。調査事例の作品、作家、年代、設置場所のリストである。

広島における彫刻の現況について、次のことがわかった。

以下の表は広島市内のモニュメントのリストである。慰霊碑などは入れてない。『広島のいしぶみはみつめる第 1 集』を参考して、市内は文字だけを刻んだ（安佐南・北除く）学校関係慰霊碑は 37 基、職域関係慰霊碑は 51 基、地域住民慰霊碑は 35 基、死没地建立慰霊碑 6 基、全犠牲者・不特定犠牲者慰霊碑 12 基、平和記念碑・平和祈念碑は 136 基、その他 87 基ということがわかった。広島ならではの慰霊碑が一番多い計 141 基であった。

(1) 慰霊碑と平和祈念碑の相違点—能動的に「平和」を伝える

広島は数多くの碑やモニュメントが存在するわけだが、ここでまず慰霊碑と平和記念碑の相違点について、簡単に説明する。慰霊碑¹⁶と平和記念碑は「対象」が限定されているものと限定されていないものといえる。

まず、限定された「対象」をもたない碑やモニュメントは、多くの人に認知されることが必要であり、そのために、「平和」を伝える働きが必要だといえる。

表1 広島市内のモニュメント							
番号	作品名	作家	建立	慰霊碑	記念碑	その他	台座
1	天使	青木優花	1921 広島・大手町			○	
2	原爆犠牲国民学校教師と子どもの碑	芥川永	1952 国際会議場南（西）側	○			○
3	嵐の中の母子像	本郷新	1952 平和公園	○			○
4	原爆犠牲ヒロシマの碑	芥川永	1954 広島・大手町		○		○
5	ジュノー博士レリーフ	芥川永	1955 袋町		○		
6	平和の門	圓鏑勝三	1957 平和公園		○		○
7	平和の塔	辻晉堂	1958 中区中島町平和大通	○			○
8	祈りの泉	圓鏑勝三	1960 平和公園		○		○
9	若葉	菊池一雄	1960 平和公園	○			○
10	友愛碑	大旗 正二	1960 平和公園		○		
11	鈴木三重吉文学碑	香取正彦	1963 平和公園		○		○
12	原爆の子の像	北村西望	1963 平和公園 所属地		○		
13	平和の時計塔		1964 平和公園		○		
14	平和の鐘	川村雅美	1964 平和公園		○		

15	平和の泉		1964 平和公園	○			
17	新聞少年の像	朝倉響子	1965 こども文化科学館南		○		○
18	二宮尊徳先生幼時の像	朝元竹仙	1966 千田町		○		○
19	梶山季之文学碑	荒川明照	1967 アステールプラザ裏		○		○
20	浴女		1967 アステールプラザ裏		○		○
21	階段モニュメント	井上武吉	1967 現代美術館北			○	
22	マイ スカイ ホール	井上武吉	1969 旧・広島厚生年金会館 裏			○	
23	マイ・スカイ・ホール 88-5	井上武吉	1970 広島現代美術館横			○	
24	少年と怪獣	伊東 敏 光	1971 大手町			○	○
25	少年の像	伊東 敏 光	1974 大手町			○	○
26	和解		1974 広島国際会議場1階ロビ ー		○		○
27	朝	圓鏝勝三	1974 広島駅新幹線口広場			○	○
28	エドマンド・ブランデン詩碑	圓鏝勝三	1974 中央図書館前		○		
29	大空	圓鏝勝三	1975 N T Tクレド基町ビル		○		○
30	再會	圓鏝勝三	1975 新幹線口 側		○		○

31	平和記念ポスト 「友情」	圓鏑勝三	1977 平和公園		○		○
32	花の精	圓鏑勝三	1977 広島城南広場		○		
33	平和の女神像	圓鏑勝三	1978 平和公園	○			
34	平和の灯	丹下健三	1979 平和公園	○			○
35	原爆死没者慰霊碑	丹下健三	1979 平和公園	○			
36	マルセル・ジュノー博士記念碑	芥川永	1979 平和公園		○		○
37	ローマ法王平和アピール碑	杭谷一東	1979 平和公園		○		○
38	地球平和監視時計	岡本敦生	1980		○		
39	平和大橋・西平和大橋	イサム・ノグチ	1981			○	
40	むつみ	圓鏑勝三	1981 広島県庁玄関ホール横			○	
41	夢に乗る	圓鏑勝三	1981 広島市子ども文化科学館前			○	
42	七つの秘蹟・彫刻	圓鏑勝三	1982 世界平和記念聖堂		○		
43	さわやかな娘	圓鏑勝三	1982 中央図書館		○		○
44	地球電話	岡本敦生	1982 広島現代美術館横			○	
45	小さな鳥	フェルナンド	1983 広島現代美術館横			○	○
46	四角い石と丸い石たち	山口牧生	1983 広島現代美術館横			○	
47	根香	空 充秋	1983 広島現代美術館横			○	

48	石で囲う	菅 木志雄	1983 広島現代美術館横			○	
49	ヒロシマ-鎮まりしものたち	マグダレーナ	1983 広島現代美術館横			○	
50	ECHO (HIROSHIMA	藤本由紀夫	1984 広島現代美術館横			○	
51	Head	フィリップ・キング	1984 広島現代美術館横			○	
52	EVE	舟越保武	1985 広島現代美術館横			○	
53	ポケット	佐藤忠良	1985 広島現代美術館横			○	
54	アーチ	ヘンリー・ムーア	1985 広島現代美術館横			○	
55	安芸の翼	澄川喜一	1985 広島現代美術館横			○	
56	私たちの星	新宮 晋	1986 広島現代美術館横			○	
57	笛吹き少年	舟越保武	1986 広島現代美術館横			○	
58	テク・テク・テク・テク	最上壽之	1987 広島現代美術館横			○	
59	時空のはじまり	岡本敦生	1988 YMCA 学園			○	
60	希望	岡本錦明	1988 広島平和記念資料館			○	○
61	世界の子どもの平和像	奥田秀樹	1988 広島市民球場の前		○		
62	平和の鐘	香取正彦	1988 広島平和記念資料館	○			
63	People at peace	梶原幸山	1988 広島市立中央図書館			○	○
64	聖観世音菩薩像	北村西望	1988 映像文化ライブラリー		○		○

65	飛躍	北村西望	1989	中央公園		○		○
66	喜ぶ少女	北村西望	1989	中区区役 所		○		○
67	将軍の孫	北村西望	1989	千田町			○	
68	飛翔	木戸修	1990	N T Tクレド基町ビル の広場			○	
69	道標	清水九兵 衛	1990	ひろしま美術館南東			○	
70	友情と平和の大太鼓	金 鐘文	1990	広島平和記念資料館		○		○
71	地の神さん		1991	堀川町		○		
72	ESPERIENZA (経験)	杭谷一東	1992	広島全日空ホテル			○	
73	仲良し地藏	國廣秀峰	1992	大手町			○	
74	風と花	桑原巨守	1994	中央公園			○	○
75	カイツブリの郷岸	小平胖可	1994	広島市民病院			○	
76	一人の春衣	小平胖可	1994	広島市民病院			○	
77	150 億の試行錯誤	桜田知文	1995	YMCA 学園			○	
78	認識の力	志水晴児	1995	中央図書館北側			○	
79	知識の函	志水晴児	1995	中央図書館東側庭			○	

80	躍動	清水多嘉 示	1995	子ども文化科学館前		○		
81	TO THE SKY	澄川喜一	1995	アステールプラザ北西 角		○		○
82	linear cycle	鈴木たか し	1996	西新天地公共広場			○	
83	サーキュレーション	鈴木たか し	1996	並木通り			○	
84	針のめぐみ	鈴木政夫	1997	中央公園		○		○
85	トーテム・愛	空充秋	1998	広島市子ども文化科学 館			○	
86	息吹き	高津和夫	2001	中区国泰 寺			○	
87	翔べ未来に向けて	高橋秀	2001	広島駅前南口				
88	ヨハネパウロ二世胸像	中田秀和	2001	世界平和記念聖堂前		○		○
89	手に手を平和にむかって	ハルク・テズナール	2004	広島国際会議場 1 階		○		○
90	NEKINI KINSAI	流 政之	2004	広島国際会議場			○	
91	NANJA MONJA SHAMOJI DE GANSU	流 政之	2005	市役所玄関ホール			○	
92	朝焼け	名久井	2005	大手町			○	
93	友愛	速水史朗	2005	子ども文化科学館前		○		

94	姉妹	林健	?	中央図書館前庭		○		○
95	いこいの森	林健	?	基町 7		○		○
96	真心像	林万寿人	?	袋町 3		○		○
97	濱井信三像	林万寿人	?	広島平和記念資料館		○		○
98	砂原格像	林万寿人	?	京口門公 園		○		○
99	愛と平和のモニュメント	レイモン・ペイネ	?	広島国際会議場		○		○
100	友愛の船出	藤原 雄	?	広島国際会議場		○		
101	はと	福田繁雄	?	広島駅前南口			○	
102	夢の待ち人	松本隆司	?	広島県庁 前		○		○
103	今日のためのうた (1	丸橋光生	?	大手町			○	
104	今日のためのうた (2)	丸橋光生	?	大手町			○	
105	池田勇人像	森野圓象	?	広島城東		○		○
106	道標・鳩	柳原義達	?	現庁舎前庭地階			○	
107	輪になって	山口牧生	?	県立総合体育館南			○	
108	愛	大和保男	?	広島市中区東白島町		○		
109	母	吉田正浪	?	袋町	○			
110	灘尾弘吉像	吉田正浪	?	基町		○		
111	衣笠祥雄顕彰	吉田正浪	?	市民球場前勝鯉の森		○		

112	加藤友三郎像	吉田正浪	？ 中央公園		○		
113	考える人		？ 胡町		○		
114	祈りの像		平和公園	○			○

例を一つ挙げる、限定された「対象」をもたない碑やモニュメントの一つである。基町の広島中央公園に設置されている「平和の鐘」は、この鐘は 1949 年に広島市に寄贈され、その年の平和祭現在平和記念式典で使用されたものである。しかし、それ以降は一度も使用



写真 1. 平和の鐘

用されず、1973 年まで、広島市や平和文化センターはこの鐘の存在を把握していなかった。1973 年 9 月 2 日の中国新聞朝刊によると、当時のこの鐘の状況は「周辺には雑草が生え、鐘を鳴らすクランクベルのひもも切れたまま、もちろん、誕生のいわれなどを示した案内板もない」と記載されていた。

1949 年の平和祭は、現在この鐘が設置されている場所で執り行われたが、1950 年では平和記念祭は中止され、1951 年には原爆供養塔前の広場で開催され、それ以降は、現在の広島平和都市記念碑前の広場で開催されている。1950 年以降の平和記念式典ではこの鐘を使用することなく、そのまま、この鐘の存在意義は希薄とになってしまう、24 年間放置されてしまった、とも考えられる。

この鐘以外にも、限定された「対象」をもたない平和記念碑・モニュメントは多量に存在する。そして、「対象」を限定していないので、メンテナンスに気を配る団体などもない場合が多く、放置されることが起こりやすいのではないだろうか。反対に「対象」をもつ碑やモニュメントは、その「対象」の関係者である企業、学校などが、年に 1 度の供養祭を執り行うことが多いので、放置されるということは起こりにくいと考えられる。

このことから、限定された「対象」をもたない碑やモニュメントは、そのままを保つため、「対象」をもつ碑やモニュメントよりも、多くの人に認知される必要があるといえる。

そのために、「平和」を伝えること、つまり、碑やモニュメントが「平和」を祈念する為に設置されているということを、まずは伝える必要があると考えられる。

(2) 平和祈念碑の特徴

平和を伝える行為には、いろいろな手段が考えられる。平和維持ボランティアとして平和活動に参加したり、インターネット上に平和を呼びかけるサイトを開いたりといろいろある。

本論で取り上げる、平和を祈念する碑やモニュメントは、この、平和を伝える手段のひとつである。

ここで、なぜこのように平和を伝える手段が様々に存在するのか、「平和」という言葉の視点から考えてみることにする。

「平和」という言葉には、「やすらかにやわらぐこと。おだやかで変わりのないこと」や「戦争がなくて世が安穏であること」という意味がある。前者は、様々な解釈が生まれる表現であり、各々の捉え方が存在する。後者は、「戦争がなく」という部分は明確であるが、「安穏」という言葉が、様々な解釈が生まれる表現であり、これも各々の捉え方が存在する。つまり「平和」という言葉には、様々な解釈や捉え方ができ、戦争がない以外には明確な定義はないといえる。

このように、「平和」が、様々な解釈や捉え方ができることによって、「平和」を伝えるための手段も様々に存在するといえる。その様々な手段の具体例として、毎年行われる平和記念式典や、ひろしまフワワーフェスティバルなどがあげられる。このように、平和を伝える様々な手段の中の一つであることが、平和祈念碑・モニュメントの特徴の一つである。

平和を伝える手段の一つである碑やモニュメントは、さらに様々な手法によって、平和祈念を表現している。これら、碑やモニュメントが、芸術によって制作されたからだと考えられる。事実、碑やモニュメントの制作者には、彫刻家である円鋳勝三や、建築家である丹下健三など、芸術家や大学の教授たちが名を連ねている。

「芸術」は「平和」と同様、様々な解釈、捉え方ができるものである。よって、絵画、彫刻、書、建築など、様々に存在する。この「芸術」で制作された碑やモニュメントは、たとえ平和を伝えるという共通する目的をもっていたとしても、「芸術」によって、上に挙げたように様々な形で表現されている。この点も、平和祈念碑・モニュメントの特徴の一

つだといえる。

(3)設置されている場所

調査事例は、彫刻の設置のしかたについて、彫刻が設置されている場所はどのような特徴がある、次のことが分かった。平和祈念碑・モニュメントは、主に公園や道路という、公共の場所に設置されている。

A 歩道が広い、通行に余裕があり、彫刻に親しむギャラリーとした場合。目立ちやすい、抽象作品が多い。

B 広場の中央にあり、広場内の視覚上の焦点となる。鑑賞方向が 360 度なので、抽象作品向きのが多い。また広場の中央ではない、角や曲がりところに設置のもの、視覚的な焦点とはならない。

C 広場の周辺に花や樹を背景に設置する場合。鑑賞方向が限定されているので、具像が多く設置されているが、目立ちにくいので、色調的にコントラストをつける。群で設置するなどの工夫がされたものは目立っている。背景の樹がまばらなものは汚い感じがする。

D 広場周辺の建物の前に設置するもの。鑑賞方向が限定されている為、具像、正面性のある抽象作品に限られる。位置的に目立ちにくいので、建物の壁面を単調にし、建物の壁と彫刻にコントラストをつけるなどの工夫をしないとわかりにくい。

E 駅前など、一つの地区の玄関的な意味を持ちロータリーの中央に設置、地区のシンボルとしてのモニュメントな意味を与えられている。シンボルに方向性を持たせて街の構造を示す場合もある。ただし、ロータリー周辺の景観によって見え方に強い影響をうける。鑑賞というイメージはあまりない。

F 建物の角のわずかなスペースに設置されている。通行上、支障をきたさないようするため、設置のためのスペースも、作品も小さくなるが、角であり目立ちやすいので、建物も含めて総合的にうまく修景すると美しい設置ができる。

なぜ公共の場所に設置されているのだろうか。それは、碑やモニュメントを多くの人々に見てもらうことによって、より多くの人に平和を伝えようとしているからだと考えられる。公共の場所に設置されていると考えられる。

実際に碑やモニュメントが、広島市を平和記念都市として象徴している。「朝の像」新幹線口前の広場に設置されている。このことから、県内外の人が多く通るであろう、新幹線口広場という場所を利用して、平和を、そして、平和祈念都市ヒロシマを、碑やモニュメ

ントによって表そうとしていると考えられる。

これも、平和祈念碑・モニュメントの特徴のひとつであると考えられる。

(4)「彫刻」に分類される碑やモニュメント

①「原爆の子の像」

建立者 広島平和をきずく児童・生徒の会



写真 2. 原爆の子の像

原爆の子の像は、1958年5月5日、広島平和をきずく児童・生徒の会によって設置された像である。この像は、白血病で亡くなった佐々木禎子さんや、原爆で亡くなった多くの子どもたちの霊を慰めるため、世界に平和を呼びかけるために建立された。この碑の碑文に「これはぼくらの叫びです世界に平和をきずくための」と刻まれている。

『ヒロシマ読本』¹⁷では、この像を、「像の高さは9メートルで、その頂上に金色の折鶴をあげ持つ少女のブロンズ像が立ち、平和な未来へ夢を托している。側面左右の二体は少年と少女と明るい希望を象徴している」と紹介していた。



写真 3. 塔の内部

塔の内部には、古代の銅を模した鐘が吊られており、さらにそのしたに、金色の鶴が吊るされている。これによって、鐘が風鈴のように音を鳴らすようになっている。この鐘は、ノーベル物理学受章者である、湯川秀樹氏が寄贈したもの、鐘の表に、千羽鶴、裏に「地に空に平和」と、湯川氏自筆の文字が彫られている。現在、この鐘と金色の鶴は、広島平和記念資料館の東館 1 階ロビに展示されている。

②「嵐の中の母子像」

嵐の中の母子の像は、広島平和記念資料館前の平和大通りにある。右手でしっかりとみどり子を抱え、左手でももう一人の幼児をかばいながら、苦しみにあたえつつ前かがみの姿勢で生き抜こうとする母親の銅像で。1960 年 8 月 5 日、広島市婦人会連合会がブロンズ像にするための募金活動を行い建立し、広島市に寄贈されたもの、彫刻家本郷新氏である。

この碑は、核兵器廃絶へ限らない努力を呼びかけるため、1959 年、第 5 回原水爆禁止世界大会が開かれた際、原水爆禁止日本協議会から、当時の浜井広島市長、原水爆禁止運動推進への感謝のしるしとして、この像の原型となった石こう像が贈られた。

建立者 広島市地域女性団体連絡協議会 （旧）広島市婦人会連合会



写真 4. 嵐の中の母子像

③平和の像「若葉」

平和の像「若葉」は、1966年5月9日に、広島南ロータリークラブが創立10周年を記念して設立された。この像は、高さ1.8mのブロンズ像で、少女が5月に風に吹かれながら、小ジカを連れて歩いている様子を表現している。製作者は、彫刻家である円鍔勝三氏であり、台座に刻まれている碑文は、「原爆の子の像」の鐘を寄贈した、ノーベル物理学賞を受賞した人湯川氏である。

湯川氏、1954年のアメリカの水爆実験に衝撃を受け、以後、世界科学者会議（バグウォッシュ会議）を開催し、核兵器と戦争の廃絶を訴えた。像は、少女とその傍らで少女を見上げている小鹿で、その像には「まがつび平和をいのる くるなかれ ふたたびここに よ人のみぞここは」と銘文が刻まれている。

建立者 広島南ロータリークラブ



写真 5. 平和の像 「若葉」

④原爆犠牲「ヒロシマの碑」

建立者 原爆犠牲ヒロシマの碑建設委員会



写真 6. 原爆犠牲「ヒロシマの碑」

1982 年 8 月 5 日、平和記念公園対岸の緑地帯に建立された。碑は、幅 3 メートル、高さ 1.5 メートル、奥行き 0.7 メートルの花崗岩の台座の上に、上半分は 彫刻家の芥川永氏

・比治山短大教授の製作によるブロンズ像で。 碑文には「天が まっかに 燃えたときわたしの からだは とかされた ヒロシマの 叫びを とともに 世界の人よ」と刻まれている。

⑤「朝の像」

朝 円鏑勝三



写真 7 朝の像

この「朝の像」は、1979 年 11 月 30 日に、広島市、広島鉄道管理局、広島商工会議所によって設置された像である。設置されている場所は、広島新幹線口に設けられている広場内だ。

この像は、彫刻家である円鏑勝三が設置したものであり、この像と同じ作品が、御調町の円鏑記念公園にも設置されている。

ここで、この像の設置目的、規格、作品に対する意図について、資料から得られた内容を紹介することとする。

国鉄広島新幹線口記念碑建設の概要

- ① 目的 新幹線の開通を記念するとともに、広島を訪ねる人々に国際平和文化都市ヒロシマを深く印象づけるため国際平和文化都市ヒロシマを象徴スルを設置した。
- ② 設置場所 広島市松原町 国鉄広島駅新幹線口広場

③ 記念碑の規格 (高さ)×(幅)×(奥行)

ア台座(大) 2.1m×2.7m×1.71m (小)1.8m×0.6m×0.6m

イ女性像(2点) 高さ 3m

ウ少年像(1点) 高さ 1.65m

エにわとり(1点)

オ鳩群像(12)

④ 記念碑の材質 台座 御影石 像 ブロンズ 金青銅着色

⑤制作者 円鏑勝三

⑥記念碑の題名 「朝」 広島発展を象徴(命名者 円鏑勝三)

この「朝」については、広島の夜明け、発想、始まり・出発を表現すべく、にわとり(朝早くからなく一番とり)、子供(今から成長する、未来のある姿)、はと(平和の象徴)、ラッパ(進行合図)を配して、躍動感を強調したことである。

⑥基町「友愛」碑



写真 8. 「友愛」

基町「友愛」碑には、現在、説明板は設置されていないが、以前は説明板が設置されており、そこには以下の文が書き記されていた。

広島デルタライオンズクラブ 20 周年記念事業 1981. 3. 21

基町「友愛」碑は、1981 年 3 月 21 日に、「広島デルタライオンズクラブ 中華民国高雄市寿山際獅子会」によって設置された碑である。設置されている場所は、広島市こども文化科学館前の広場だ。この碑は、西尾の『広島のいしぶみはみつめる第 1 集』で「平和祈念碑・平和祈願施設」のひとつとして紹介されていた¹⁸。

⑦「世界の子供の平和像」



写真 9. 「世界の子供の平和像」

「世界の子どもの平和像」に設置されていた説明板には、以下の文が書き記されていた。

世界の子どもの平和像

核兵器のない世界のために この像はヒロシマの子どもたちの 愛と平和のメッセージです 2001 年 8 月 6 日

「世界の子どもの平和像」は、2001 年 8 月 6 日、世界のこどもの平和像を広島につくる会が設置した像である。場所は、原爆ドームの電車どおりを挟んだ反対側の、広島市民球場前。カープの優勝記念碑などに負けず、その斬新な姿で見ると引き付ける。元は、1995 年、アメリカの小学生達が、「原爆の子の像」の姉妹版をアルバキーニ市内に建設し

「世界の平和像を」とよびかけたのがきっかけという。「高校生平和ゼミナール」のメンバーなど、広島市の高校生たちが、街頭募金や機関紙で呼びかけ、七百万円を集めて建立にこぎつけた。

この像のデザインは、同時、比治山女子高等学校に通っていた、正木あやか発案のものである。世界のこどもの平和像を広島に作る会が主催した、「せこへい」デザインコンペで、正木のデザイン案が大賞をとり、選ばれた。資料によると、このデザインについて正木は、以下のようにコメントしていた。

子どもにとって、大人の愛はとても大切だと思います。その暖かい愛で子供達を見守り、共に育てていこう。そして子供達も、その愛を素直に受け止めることのできる柔軟なところをいつまでも失わずにいよう、という思いを込めて描きました。像は、奥にいるのが(像の手前が)、こどもで、手前が(像の奥が)大人の男性と女性です。[下略]『せこへい』

この像の除幕式の際、世界の子供の平和像を広島につくる会が発表した、「私たちの反核平和アピール」から抜粋したのもである。

⑧動員学徒慰霊塔

建立者 広島県動員学徒犠牲者の会



写真 10. 動員学徒慰霊塔

原爆ドームの南側にある高さ 12 メートルの 5 層の塔である。やさしい表情で立つ平和の女神像と屋根の上で舞う 8 羽のハトが平和への思いを伝える。この慰霊塔は、学徒動員作業中に亡くなった国民学校高等科、旧制中学校、高等女学校の戦争犠牲者を慰霊するため、1967 年 7 月、広島県動員学徒犠牲者の会により建立された。

塔の左右に、4 枚のレリーフがある。文化勲章を受賞した彫刻家、圓鋸勝三氏が制作したのですが、レリーフには食糧増産作業、女子生徒の縫製作業、工場における作業状況、広島の花火流しが描かれている。

第二次世界大戦中、労働力の不足を補うため、動員学徒として奉仕し、戦禍県に巻き込まれて死亡した子どもや、原爆の犠牲者を含めた約 1 万人の学徒の霊を慰めるために、原爆ドームの近くに建立された。

⑨原爆犠牲国民学校教師と子供の碑

建立者 原爆犠牲国民学校教師と子供の碑建設委員会



写真 11. 原爆犠牲国民学校教師と子供の碑

原爆犠牲国民学校教師と子供の碑は、広島国際会議場南側に立っている。この碑は原爆によって生命を奪われた子どもと教師を慰めるとともに、「三たび原爆を許してはいけない」という平和教育を、現在及び未来に推し進める決意を表している。

像の裏に鎮魂歌が記されている。教師約 200 人、子ども約 2,000 人が犠牲になったと推定されての裏には「太き骨は先生ならむ そのそばに ちいさきあたまの骨 あつまれり」

という正田篠枝のいる。製作者は芥川永。

原爆の惨禍のなかで、教師を頼りながら死んでいった児童・生徒と、彼らを気遣いながら死んでいった教師の無念さを表現している。

⑩平和乃観音像

建立者 中島本町会



写真 12. 平和乃観音像

平和乃観音像は平和記念公園の北側一帯に立っている、明治・大正・昭和初期にかけて、市内の繁華街の中心だった。中島本町は爆心地にほど近く、住民はほぼ全滅、458 人が犠牲になりました。戦後、この地は平和記念公園となったため、生存者も転地を余儀なくされ、町は姿を消した。

当初、平和記念公園内に宗教的なものを建ててはならないという指導があったが、芸術作品ということで承認された。中島地区の公園内に最初に建てられた碑である。

以下、これらの「彫刻」に分類される碑やモニュメントがどのような表現をしていたか、まとめることとする。

まずは「彫刻」の形状について、一つは、目に見えるものをそのままの形で表した具像

なもの。もう一つは、目に見えるもの、あるいは、目に見えないものを、制作者の発想によって独特の形にした抽象的なものである。

そして、「彫刻」の表現にも2種類ある。一つは、争いの中で状況を表現しているもので、これは、原子爆弾の恐ろしさ、悲惨を表現しているというものである。もう一つは、平和の中での状況を表現しているもので、これは、平和の尊さ、大切さを表現しているというものだ。

前で取り上げた碑やモニュメントを、上で挙げた2種類の形と、2種類の表現にそれぞれみることとする。

目に見えるものをそのままの形で表し、争いの中での状況を表現しているもの。こらは「嵐の中の母子像」があてはまる。そして、平和の中での状況を表現しているもの。これは、「原爆の子の像」、平和の像「若葉」、「原爆犠牲国民学校教師と子供の碑」、「朝の像」があてはまる。

次に目に見えるもの、あるいは、目に見えないものを、制作者によって独特の形で表し、争いの中での状況を表現しているもの。これは、原爆犠牲「ヒロシマの碑」、「動員学徒慰霊塔」があてはまる。そして、平和の中での状況を表現しているもの。これは「世界の子ども達の平和像」があてはまる。

以上、4種類の表現が平和祈念碑やモニュメントから見受けられた。

なお、基町「有愛」の碑は、何を表現しているものなのかわからない、ここで分類することができないが、形状は、目に見えるもの、あるいは、目に見えないものを、作者の発想によって独特の形にしたものにあてはまる。

次、これらの「彫刻」に分類される碑やモニュメントが「平和」を伝えていくため説明板にどのような点を書き記すべきか考えよう。

まず、「彫刻」とは、見る人に対して、視覚に主張を伝えるものであるので、見る人々が「彫刻」をみて、制作者が伝えようとした主張を感じ得るとは限らない。

例えば、「朝の像」は、一つ一つの像に意味をもたせて、広島の日明け、発展、始まり、出発を表現していたが、これは見る人全員にその通りに伝わっているとは限らない。にわたりの像を配置することで早朝を表現していると考えられるが、それだけで、みる人全員が夜明けを表しているということに気づくことができるだろうか。また、ラッペを吹いている子どもの像を配置することで、発展、始まり、出発を表現していると考えられるが、それだけで、見る人全員がその意図に気づけるだろうか。

原爆犠牲「ヒロシマの碑」と「世界の子どもの平和像」、基町「有愛」碑は、制作者の発想によって独特の形にして表したもので、これは見る人全員が何を表しているのか理解できるとは限らない。

「嵐に中の母子像」も、悲惨な状況を表したもので、見る人によっては憎しみを伝えてしまう可能性も考えられるだろう。

このように、見る人によって様々な解釈が生まれる「彫刻」に分類される碑やモニュメントは、「彫刻」に対する見解を説明板に書き記すことが、「平和」伝えるためには必要だと考えられる。

「彫刻」に対する見解といっても、上で挙げた形状や表現によって主に見解すべき点が異なるといえる。まず、目に見えるものをそのままの形で表した具像なものなら、その像一体一体にこめられた意図について、主に見解することが必要だろう。そして、目に見えるもの、あるいは、目に見えないものを、制作者の発想によって独特の形にした抽象的なものなら、何を形にしているのかについて、主に見解することが必要だろう。そして、争いの中での状況を表現しているものや、平和の中の状況を表現しているものは、制作者が像に込めた平和祈念について、主に見解することが必要だろう。

この点を、これらの碑やモニュメントを見る人に伝えることで、見る人に思索させることなく、より円滑に平和を伝えられると考えられる。そして、争いの中での状況を表現している碑やモニュメントも、そこから憎しみを伝えているのではなく、平和祈念しているものであると、伝えられることができると考えられる。

前で取り上げた碑やモニュメントのうち、説明板に書き記していたのは、「原爆の子の像」、「嵐の中の母子像」のわずか2基であった。

「平和」を伝えるため、そして碑やモニュメントの存在意義を高めるためにも、説明板に制作者名や建立者名だけでなく、「彫刻」に対する見解も、それぞれ書き記してほしい。

(5) 「工芸」に分類される碑やモニュメント

①広島悲願の会「平和の鐘」

広島悲願の会「平和の鐘」に設置されていた説明板には、以下の文が書き記されていた。

一つめの説明板

平和の鐘

この梵鐘・鐘堂は、広島悲願に立って、すべての核兵器と戦争のない、まことの平和共存の世界を達成することをめざし、その精神文化運動のシンボルとしてつくりました。この梵鐘・鐘堂は、平和を願う万人の心と浄財を結晶させて、つくりました。この鐘の音を広島から世界のすみずみまで、ひびきわたらせ、全人類のひとりひとりの心にしみわたらせることを願っております。（昭和 39 年 9 月 20 日建之 広島悲願の会）

（以上の文の英語訳もあったが、ここで省略することとする）

二つめの説明板

お願い

この平和の鐘は、貴重なものですから、大切に取扱って下さい。 広島市

（以上の文の英語訳もあったが、ここで省略することとする）



写真 13. 「平和の鐘」

広島悲願の会 1964 年 9 月 20 日に原爆被災者広島悲願結晶の会によって設置された鐘である。設置されている場所は、平和記念公園北側で、「平和の時計塔」の南側に位置する。

この鐘の制作者は、平和記念式典の際に使用される「平和の鐘」の制作者でもある、香取正彦である。

鐘の表面には「世界は一つ」を象徴する、国境のない世界地図が浮き彫りにされています。撞座は、原水爆禁止の思いをこめて原子力マークにし、その反対側には、撞く人の己の心を写した鏡が入れられています。

鐘楼の周囲の池にはハスが植えられ、毎年、8月6日の平和記念日の頃になると美しい花を咲かせる。

②「地球平和監視時計」

「地球平和監視時計」に設置されていた説明板には、以下の文が書き記されていた。

一つめの説明板

1 この塔は、上下2段のデジタルの日数表示は、1段目が「広島への原爆投下からの日数」、2段目が「最後の核実験からの日数」を表しています。新たな核実験が行われるたびに、「最後の核実験からの日数」がゼロにリセットされます。あらたな核実験が強行された場合、この日数をゼロにリセットすることで、広島からの抗議の力を増幅させます。日数表示の下にある歯車装置は、このままいけば人類が破滅へ向けての「刻限」を刻み続けることを暗示的に警告しています。

歯車は縦に15個並んでおり、一番上の歯車の回転数（毎分100回転）が、地球の危機的状況の深刻化により早く回転し、固定されている一番下の歯車に達したとき、装置そのものも自壊するという発想で制作したものです。

この歯車の回転を止めるため、核兵器廃絶に向けて英知を結集し、軍事力に頼らない共生の時代を求めていかなければならないことを訴えています。

（以上の文の英語訳もあったが、ここで省略することとする）

二つめの説明板

建立年月日 2001（平成13）年8月6日

建立者 NPO法人 広島からの「地球平和監視」を考える会

設計者 岡本敦生



写真 14. 「地球平和監視時計」

「地球平和監視時計」は、2001年8月6日、修道高の卒業生らでつくるNPO法人 広島からの「地球平和監視」を考える会によって、設置された時計である。設置されている場所は、広島平和記念資料館東館の1階ロビーだ。設計者は、岡本敦生である。被爆体験の風化を防ぎ、繰り返される核実験の実施をけん制する意図で制作され、広島市に寄贈された。

この時計の除幕式の際に、時計を発案した同会の土井淳夫事務局長は、「平和の監視は今日から始まったばかり。二つの日数を見ながら、核兵器のない世界の実現に気持ちを新たにしたい。

以上二つの例からみる「工芸」に分類される碑やモニュメントに見受けられた表現。ここで、「工芸」がどのような表現によって平和を祈念しているのか、ということについてまとめることとする。

「工芸」に分類される碑やモニュメントは、すべて実用的な面を生かして平和祈念しており、そして、あるものは、外形にも平和を祈念する意図を含ませているものもある。

まず、実用的な面というのはそれぞれどのようなことであるのか、述べることとする

「平和の鐘」は、年に1度、8月6日に行われる平和記念式典で打ち鳴らし、鐘の音を響き渡らせることで黙祷の合図を送り、平和の願いを送っている。そして、広島悲願の会「平和の鐘」は、平和記念公園内に常に設置されているもので、平和記念式典で使用する「平和の鐘」とは違う、誰でも、いつでも、鐘を鳴らすことができ、鐘を撞くことによって平和の願いを伝えることができる。

「地球平和監視時計」は時を刻むだけではなく、「広島への原爆投下からの日数」と、「最後の核実験からの日数」を表示することによって、時計を見る人に核脅威が現在でも続いていることを知らせ、核に対する意識を高め、平和を伝えようとしている。これは、時を刻む、という実用的な面で平和を祈念していると考えられる。

以上が、実用的な面を生かして平和を祈念しているということである。

そして、外形にも平和を祈念する意図を含ませているもの。これは「平和の鐘」が、あてはまる。

次、「工芸」に分類される碑やモニュメントが、「平和」を伝えていくため、説明板にどのような点を書き記すべきか考えてみよう。

これらは、実用的な面で平和を祈念しているものなので、その使用方法について説明板に書き記すことが必要だと考えられる。それによって、見る人に、これらの碑やモニュメントが平和を祈念しているものであることを伝えられ、見る人が、平和を祈念するために使用することができる。

そして、外形にも平和を祈念する意図を含ませているものは、そのことについても説明板に書き記すことが必要だと考えられる。実用的な面だけでなく、外形によって、どのように平和を祈念しているのかという点を伝えることによって、見る人に、制作者の込めたい思いを伝え、制作者の表現する平和祈念を伝えることができる。そのことで、さらに見る人に平和を伝えられるのではないかと考えられる。

前で取り上げた2基の碑やモニュメントは、実用的な面を生かして平和を祈念しているという点を、2基とも説明板に書き記していた。

「工芸」に分類される碑やモニュメントは、実用的な面だけでなく、外形においても、制作者の平和への思い込められているのがある。さらに「平和」を伝えるために、以上のことについても説明板に書き記してほしい。

(6)「建築」に分類される碑やモニュメント

原爆死没者慰霊碑（広島平和都市記念碑）

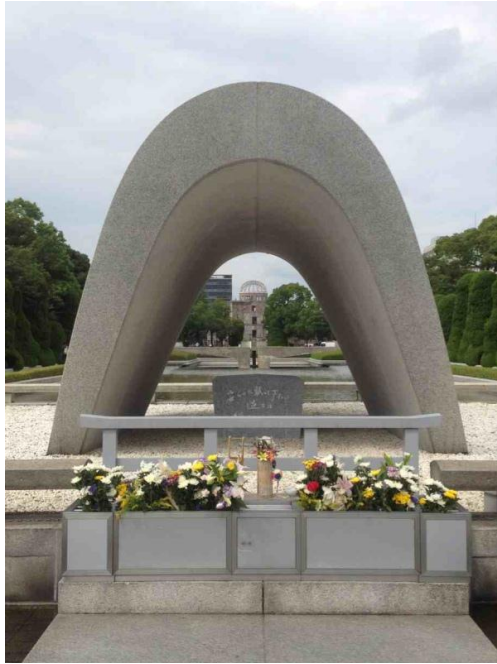


写真 15. 原爆死没者慰霊碑（広島平和都市記念碑）

碑文「安らかに眠って下さい 過ちは繰返させぬから」 雑賀忠義 本人揮ごう

建立年月日 1952（昭和 27）年 8 月 6 日

建立者 広島市

設計者 丹下健三（当時・東大助教授）

形状

材質：みかげ石「黒髪石」（石室部分）

みかげ石「稲田石」（屋根部分）（1985（昭和 60）年の改築工事まではコンクリート製）

形態：屋根の部分は、はにわの家型（犠牲者の霊を雨露から守りたいという気持ちからこの型にした）

1. 碑文の由来

諸霊の冥福を祈る気持ちを誓いの言葉に結びつけることに苦慮した当時の浜井市長の命を受けた秘書係長が、碑文の古典研究に造詣の深い広島大学の雑賀忠義教授に碑文の作成を依頼し、翌日即決した。

2. 碑文の趣旨

碑文については主語をめぐるさまざまな議論があったが、広島市は碑文の趣旨を正確に伝えるため、日・英の説明板を設置し、「碑文はすべての人びとが原爆犠牲者の冥福を祈り戦争という過ちを再び繰り返さないことを誓う言葉である 過去の悲しみに耐え憎しみを乗り越えて全人類の共存と繁栄を願い真の世界平和の実現を祈念するヒロシマの心がここに刻まれている」と記している。

3. 原爆死没者名簿

中央の石室には、国内外を問わず、原子爆弾に被爆し、亡くなられた方の名前を記帳した原爆死没者名簿が納められている。名簿は関係者の申し出により書き加えられ、2010（平成 22）年 8 月 6 日現在で、97 冊（269,446 人の名前が記帳された 96 冊と「氏名不詳者 多数」と記された 1 冊）になっている。

広島平和都市記念碑は、1952 年に原爆犠牲者の魂を尊重し慰めるために丹下健三によって建立された。この記念碑は、国籍、職業を問わず犠牲者の霊を雨露から守りたいという気持ちから、屋根の形、家型はにわの形をしている。しかし、慰霊堂は、競技設計審査員の一人、岸田日出刀氏の指摘であった。丹下の依頼によるイサム・ノグチの案は利用されなかった。結果として、ノグチ氏の案を修正した丹下の埴輪型のデザインが実現された。当初、考案されていたは、正面からみた底辺 4.7 メートル、高さ 3.67 メートル、横から見た上辺 8.29 メートル、下辺 5.26 メートルの埴輪型に小さく変更された。この碑は広島市により、1984 年 7 月 23 日から改築工事が行われ、1985 年 3 月 26 日、新しい慰霊碑の除幕式が行われた。新しい碑は同型であるが、材質はコンクリートからみかげ石に変更された。この変更の理由は、コンクリートの石灰分が表面に吹き出し、中の鉄筋の腐食が進み、碑にひびが入ることが明らかになったことと、原爆死没者名簿が 32 冊入っているが、あと数冊の余裕しか残っていないことからである。この中の石室には、国内外問わず、原子爆弾で死亡した人の名前をし記帳した原爆死没者名簿が納められている。この名簿に記帳

された人数は、2011 年 8 月 6 日、100 冊、275,230 人である。この碑には、「安らかに眠って下過ちは繰返しませぬから」と刻まれている。この碑文を作成したのは、英文学専攻であり、中国の碑文に詳しかった広島大学教授であった雑賀忠義である。

碑の起源、原爆死没者慰霊碑（広島平和都市記念碑）の碑は、1948 年、広島ピースセンターコンペで、丹下にとって成果なく終わった。そして、1949 年が丹下にとって運命の年となる。

広島市平和記念公園及び記念館競技設計(今日というところの広島ピースセンターのコンペ)。

1945 年 8 月 6 日、原爆は広島に都市の死と人の死のふたつをもたらした。都市の死については、復興計画が立てられ、丹下の復興案を論議した広島市復興計画審議会の席上、新たに作る公園を平和を祈念する平和公園として性格づけ、意見も出された。

人の死については、市民の自主的な動きが先行する。生き残った人々は、焼け跡から拾った身元不明者の遺骨を集め、三角地のそこここに盛って塚とし、無縁仏の霊を慰めた。こうした状況を見て、きちんとした慰霊堂を建てるべきだという声が市民の間上がっていく。不幸に終わった死者の遺骨の扱いと慰霊は、日本人にとっては重大事なのである。

都市の死についての平和公園、人の死についての慰霊堂、このふたつは一体化し、運動として盛り上がっていく。盛り上げたのは、浜井信三郎市長と占領軍のジャーヴィ少佐。

1947 年 9 月、建築家ジャーヴィ少佐は、広島市の復興顧問となる。1948 年に集中的になされた慰霊堂・平和公園建設の準備に、丹下は復興都市計画に引き続いてかかわっていく。

都市計画の顧問ジャーヴィ少佐は五重塔のような鐘楼の構想をもった。

当時丹下はこの計画を強く批判した。丹下の考えは(平和は訪れて来るものではなく、闘いとらなければならないものである)。建設しようとする施設は、平和を創り出すための工場でありたいと考えた。

丹下は五重塔計画を批判だけでなく、浜井信三郎市長からの相談に対し、平和公園施設の内容について提案した。(具体的には、広場、国際会議場、食堂、図書館、原爆資料展示室、そして慰霊堂を含む記念堂の建設)。

丹下が市長の相談に答えてから 1 年ほど、1949 年 5 月 11 日、広島平和記念都市建設法が国会で可決され、20 日コンペ開催の発表がなされた。史上初めてヒロシマ、核の時代が建築のテーマとして問われる。7 月 20 日、コンペは締め切られる。応募数は 132 作品。応

募者は、入選した丹下、山下寿郎、荒井龍三のほかは、佐藤重夫、菊竹清訓、吉武長一、(前川国男、大高正人は途中でやめた)。132 作品の審査は、最終段階で 16 作品に絞られ。一回目の一人 3 作品の投票で山下 5 票を得て一位。丹下案は 2 票で 5 位(支持者わずか 2 名)。上位 8 作品を対象とした二回目の投票はひとり 1 作品で行われ。1 位丹下案 4 票、2 位山下案 1 票。逆転 1 等当選の丹下は、初めて実際に建つ建物に届くことができた。コンペ当選 36 歳、建築完成 42 歳。丹下は世界の建築界に知られることになる。

丹下案を具体的に見てみる。最初に固まった全体計画の骨格から、100m 道路を横軸(東西)とし、縦軸(南北)を原爆ドームに向けて引く。この十字軸は、動線に重なるだけでなく、視覚の軸ともなり、横軸の東の先には比治山が望まれ、西の端には丘陵が盛り上がる。縦軸の目指すには、もちろん原爆ドーム。縦軸を中軸として 4 つの基本的な施設、記念館、広場、祈りの場所、原爆の遺骸が配置されている。記念館というのは国際会議場、陳列館、本館からなる三棟一体の建物で、広場へのゲートとして置かれる。

丹下は、軸というものを巧みに使うことによって、建築のスケール→公園のスケール都市のスケール→海山のスケール、と各スケールをおひと秩序の上に載せることに成功した。建築の配置でもうひとつ成功しているのは記念碑の演出。ゲート、アーチといった空隙的な装置で広場を画し、しかし、視線をはるかに望む小さなシンボルに収束させる(物量ではなくて場による記念碑性)。争をはさんでの 7 年間に、大東亜コンペ、在盤谷コンペ、広島平和記念聖堂コンペ、ピースセンターコンペ、と連続する。4 つのコンペ案にはいくつもの共通点が観察される。まず建物の形から大きく盛り上がるような形、小さいが強い印象でとがる形、水平に伸びる形、3 つの形の組み合わせからなる。平和記念聖堂は、聖堂+鐘楼+回廊。

ピースセンターは、大アーチ+原爆ドーム+3 棟一体の記念館そして、3 つの形を広場と組み合わせて独立的、散在気味に扱い、小さいが鋭くとがる形にはシンボル性を付与し、水平に伸びる形は回廊的そして、3 つの形、広場、軸を巧みに関係させることによって場の記念碑性が生まれる。¹⁷

次、「建築」に分類される碑やモニュメントがどのような表現によって、平和を伝えていたにか、まとめることとする。①建造物の外観の設計によって、平和を伝えているもの。②建造物の実用性によって、平和を伝えているもの。

また、「建築」に分類される碑やモニュメントが、「平和」を伝えていくため、説明板にどのような点を書き記すべきか考えてみよう。

まず、建造物の外観の設計によって、平和を伝えている碑やモニュメントだが、これは、設計に平和を伝える意図を含ませているので、その点を、見る人に伝えることが、より平和を伝えられることに繋がるのではと考えられる。

例えば、「広島平和記念資料館」の本館下の空間は、平和大通りから原爆ドームへの視線を遮ないように設計され、そして、平和記念公園への入り口、ゲートの役割も果たしていると考えられるが、このことに対する説明は「広島平和記念資料館」におかれていた石碑にもリーフレットにも書き記されてはいない。これは、「広島平和記念資料館」が、平和を祈る空間として作られた平和記念公園と運動して平和を記念していることを、その場でそれぞれをみる人たちに伝えていないと言えるのではないだろうか。この点を石碑、あるいは、リーフレットにも書き加えることで、設計者である丹下の「平和」を祈念する意図が伝わり、より平和を伝えられるのではないかと考える。

次、建造物の実用性によって、平和を伝えているもの。これは、どのようなことで平和を伝えているのかという点を、説明板に書き記すことが必要であると考えられる。

広島平和記念式典とは毎年、広島県広島市に原爆が投下された8月6日の原爆忌に広島平和記念公園で行われる、原爆死没者の霊を慰め、世界の恒久平和を祈念するための式典である。なお正式には「広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式」という。

「建築」に分類された碑は、以上のことを説明に書き加えることで、さらに、「平和」を伝えられると考えられる。なので、建造物の名称だけではなく、以上のことについても、説明板に書き記してほしい。

以上、碑やモニュメントが表現している主張はともなく、まず、歴史的を伝えるうえでは、碑やモニュメントを身近な場所に設置することは意味があると考えられる。

第 3 章

広島における彫刻設置

1. 広島における現状

前記でまとめた実態調査の結果を場所と彫刻という観点から整理すると、広島における彫刻設置について、次のことがわかる。

広島市における彫刻設置は全般的に団体企業の寄贈によるものが多く、次のような特性を持っている。

A. 慰霊碑から造られたもの等、地域住民に密着した形のものが多い。

彫刻として対象となるものの約半数が慰霊碑、記念碑であり、その他等を加えると、地域住民に密着した彫刻が多いのが広島市の特性であるといえる。

そして、それらは公園の中に設置されているので、広島市民にとって彫刻とは、慰霊碑、記念碑であるという印象が強いといえる。

しかし、一方でそれは彫刻芸術として決して秀れた作品とはいえないものが多いことも否めず、そのまま今後の彫刻設置の方針とはなりにくいと思う。

B. 彫刻の為の修景は特別にされていない

彫刻の選択とその設置については、形式的には彫刻(設置の目的、彫刻のテーマという意味も含めて)が先に決まり、全般的に、周辺の修景及び維持管理が充分なされている場所が少なくなっている。

C. 広島の彫刻設置空間の現状は次のように整理する。

彫刻の広島に対して持っている存在意義は、地域住民に密着した題材で、その場所をシンボリックな空間としている役割が大きい。

広島における彫刻の位置づけは、都市を修景する要素の一部である。

彫刻の設置されている場所はほとんどが公園内である。

彫刻が先に選定されテーマや実物が決定してそれに合った場所を探して設置する。

彫刻の設置されている場所は人の多く集まる都市の中心部に集中して設置されている。

以上を総合すると、広島における彫刻設置状況は、広島市の持っている自然的、人文的条件に影響を受けた都市形成の動向を反映しているといえる。

広島のまちは昭和 20 年の原爆投下により、まち全体が灰に帰して、文字通りゼロから出発したまちづくりといえる。広島としてはどのようなまちづくりを進めていくかと

いう中で、彫刻を設置していかななくてはならない段階にきている。しかし、一方ゼロからの出発は、あらゆる場所への意味づけの歴史でもあったということになる。その中で原爆投下と平和への願いとは意味をになったシンボルとして、まちを構成する記号の一部となっている。

広島における場所への意味づけというまちづくりの流れは、通りの名前をつけることなどを含んで、今後も中心的な方向であることに変わりがないと考えられる。

広島市は、昭和53年9月に策定した広島市新基本計画において、都市像として「国際平和文化都市」を掲げ、世界の平和に貢献するまちの実現をめざしている。都市像を実現するため、さまざまな施策が展開されているが、その中で、彫刻のあるまちづくりを推進することも、この都市像を実現するための一環として推進されなければならないことは当然である。

彫刻のあるまちづくりは、都市像である「国際平和文化都市」の実現をめざした豊かな人間性を育むまちづくりの中で推進していくものであり、その視点は豊かな文化環境の創造にある。具体的には、広島に住む市民にとっても、広島を訪れる人々にとっても魅力があるまち、文化的雰囲気をもった都市づくり、後世に文化遺産を残していくという目的意識を持って事業の推進を図ることが重要である。

広島市文化懇話会提言では、広島市の文化都市像として「みんなが創造性を大切にするまち」を掲げており、この文化都市像を実現していくための具体的提案として、市民が日々の生活の中でゆとりとやすらぎを感じる場として「都市空間の文化的活用」をあげている。彫刻のあるまちづくりは、都市空間の文化的活用を図るための施策としても位置づけられるものである。

広島市文化懇話会提言では「都市空間の文化的活用」の中で、市民が日常さりげなく通る道、利用する広場・公園などが和らいだ雰囲気をもち、お互いのふれあいの気運を起こさせ、また、無意識のうちに美的感覚も磨かれていくようなものであってほしいとしているが、そのための具体的な方策として、次のような提案がされている。

- ① 広島の都市の中に残された大きな自然であり。広島の顔である川に注目し、市民生活の中で、いろいろな形に利用できるものにしていく。
- ② 児童公園、近隣公園、歩道、広場などに噴水、野外彫刻、フラワーポット、ベンチ、植栽等を配置して、独特の空間を作り出したり、緑のボリュームを感じさせる空間とする。
- ③ 市街地にあっては、散歩道やその中継点、結節点の小さな広場や入り角空間を利用して

気の利いた小公園を巧みに配置し、彫刻、噴水、時計等で変化をもたせ、親しみのある空間にしていく。

まちなかへの彫刻の設置については、雑然とした都市空間の中に埋没しないよう、彫刻の種類、設置場所・方法について気づいて、公園や緑地と調和させていく。広島のまちづくりに生かされてくると、都市空間は飛躍的にすばらしいものになっていくとともに、市民の心の中に触れ、まちづくりへの参加意欲を増幅していくものと期待している。

そして、このような中で場所を意味づけるシンボルとしての彫刻は非常に大きな役割をなっていくものと考えられ、彫刻設置の構成がその一帯にあるイメージを喚起する手掛りとなるといえる。

2. 広島方式の設定

広島方式の彫刻設置を考えるにあたっては、次の面からの検討が必要になる。

(1) 広島のイメージを代表する都市空間

① 水の都広島

広島は水の都と呼ばれている。広島市が都市として発達してきた理由を考えると、川や海との関係を抜きにしては考えられないほど、川や海は広島の発達に重要な役割を果たしてきている。旧市内を6つの川に分流しながら広島湾に達している。そして、広島のまちは、このような太田川のデルタの形成とともに発達し、都心部は現在の太田川デルタのほぼ中央部に形成されている。

現在の広島市にとって、川や海は大きな自然空間として貴重な財産となっており、いわば広島の顔であり、広島のイメージを代表する空間である。

水の都広島というイメージを形成する空間として次のような空間を考え、彫刻を設置してその空間の個性と風格を高めていくことが効果的である。

都心部における河川沿いに形成される空間で、将来は主要な河川沿いに歩行者のための緑地空間として整備され、文字通り広島のイメージを強くなっていくことが期待される。

現在、橋は必ずしも歩行者が水面をゆっくり鑑賞する場所となっているとはいえず、歩行者空間としての充実が望まれる。

しかし、広島が水の都にふさわしいまちであるためには、橋は親しみや、やすらぎを感じながら利用できる空間であるとともに、視覚的にも大きなオブジェとして、景観の中で

重要な位置を占めるものであることが望ましい。

まず橋そのものの美化と歩行者のための空間として充実させることが、広島印象を飛躍的に良くしていくこととなる。そして、そこが市民の芸術的関心を高め、自由な気持ちを広げ、まちづくりへの参加意欲をかきたてる場所となるために彫刻の役割は大きいといえる。

広島は、瀬戸内海に接した長い海岸線に恵まれているが、現在そのほとんどが工場、流通施設で占められており、市民が楽しめる海岸は少ない。

しかし、海に接しているというイメージは、人の活動が海とかかわる港によっても意識される。

港そのものを美化して市民に近よりやすく親しみのわく場所とするとともに、港を眺望でき人が集まれる場所をさがして広島を代表する眺望点の 1 つとして整備することも大きな効果があると考えられる。

水の都ということ、川や海そのものだけとは考えず、噴水、壁泉、流水等を街の中へ積極的に導入することによって公園や広場の新しい魅力をつくりだしていくことも効果的である。

このような修景の中で、適切に選択された彫刻を設置するにより、市民や広島を訪れる人々に水の都広島を強く印象づけるとともに、その彫刻が親しみのわく存在となるようなエピソードやなつかしさを与えることが期待される。

② 緑の広島

広島においては、市街地内の公園、緑地だけではなく周辺部の山並も身近なレクリエーション空間であり、緑は鑑賞と利用の両面を持ったものといえる。このような緑の空間に設置される彫刻は、鑑賞としてのやすらぎと、利用としての親しみの両方の意味で大きな設置の意義が期待される。市街地の中の公園、緑地、都心部の公園、緑地はそれぞれ独特の場所とするという意味で彫刻設置とかかわりがあるが、周辺部の公園、緑地については環境性としての背景の山並や水面を含めた心象風景を構成する彫刻設置となったり、その土地のエピソードや出来事を象徴する地域性としての彫刻設置となったりする。

レクリエーション緑地。利用の対象としての緑地には、その中の活動が動的である空間と静的である空間が考えられる。

そして動的な空間では、彫刻は近いものとしてそこを楽しく活動的な場所とするものとして期待される。

一方、静的な空間においては、自然と人間の精神的交流を触発するような地域性の強い彫刻設置の可能性が考えられる。

③ 公共的空間の個性化

これまでに説明した空間だけでなく、散策のための道と公共建築物の周辺も市民の日常生活においてよく利用される空間であり、広島イメージを代表する公共空間として考える必要がある。

まず、道・通り。広島市では、現在都心部をはじめとして、歩行者が気持ちよく散策できる空間が少なく、しかも、それがネットワーク化されておらず、断片的に存在している。広島市にとっては、歩行者のための空間の創造ということが非常に重要であり、まちづくりの中で順次整備されつつある状況にある。

そして、歩行者のための空間として整備された道は、市民の日常生活の中で散策、憩いの場として利用されている。

これまであげた広島を代表する空間は、全て道を含んでおり、それはそれぞれの自然や歴史を持った場所を貫き、人間の移動に対応するものであり、その中に彫刻を設置することは環境性、地域性としてその場所にアクセントをつけ、散策をより意義深いものにすることが期待される。

次、公共建築物。公共的な建物は、市民の多くが訪れ利用するとともに、その街のシンボルの1つでもあることから、市民がいただく広島イメージの中で大きな比重を占めるものであり、また、これは広島を訪れる人にとっても大きな印象を与えるものである。

このような空間を景観としても美しく、また、公共建築物を個性化するため、彫刻を設置していくことは意義のあるものであるといえる。

(2) 都心部の充実と周囲への広がり

現在の広島市には明確に都心部が形成されつつあるが、この都心部は中国四国地方の中核都市あるいは政令指定都市としての広島市の顔であり、市民にとっても広島を訪れる人々にとっても印象深い、広島イメージを決定づける空間である。このような観点から、彫刻のあるまちづくりを推進するうえで、都心部から彫刻設置を進めていくことが戦略的であり効果的であるといえる。

都心部の範囲。広島市の中心市街地（旧広島市）は、東と西と北に山並みを背負い、南

に海を控えた太田川デルタの上に形成されている。従って景観上からは、山並みと海岸線で囲まれた旧広島市のほぼ全域が都心部といえる。

しかし、主要な施設の配置状況、商業・業務施設の立地状況などから中心性を考えると、西側を太田川放水路、北側を山陽本線、東側を京橋川、南側を国道2号線で囲んだ範囲が都心部であり、彫刻のあるまちづくりでは、この範囲に接する広島・横川・西広島駅周辺、比治山公園を含めた範囲を都心部と考えることが適切である。

都心部の核と軸。次のような核や軸が設定される。核…公園（平和記念公園、中央公園、広島城、比治山公園）駅（広島駅、横川駅、西広島駅）。軸…道路（平和大通り、鯉城通り、相生通り、中央通りその他）河川（太田川放水路、天満川、太田川、元安川、京橋川、猿候川）。彫刻設置にふさわしい核と軸。彫刻のあるまちづくりとして、都心部の中でも特に主要な骨格を形成し、広島における彫刻設置の意義が最も効果的にあらわれる空間は次のように考えられる。

それは、その空間が持っている意味をテーマとした彫刻が設置され、独特の場所とすることが可能な核と軸であるといえる。

A. 平和大通り、比治山公園で形成される軸

国際平和文化都市広島を象徴する平和大通りがこの軸をつくっている。ここは“祈り”の空間という意味を持っており、ここには核としての平和記念公園があり、新しく比治山公園にも「平和の森」を計画し、西に向って太陽を望むを計画して、その意味を強調している。

そして比治山公園は、文化都市広島の新しい顔として芸術公園とすることが決定しているので、文字通りこの軸は国際平和文化都市を代表する軸といえる。

従って彫刻設置の意義は、シンボル性であり、テーマは広島としての「祈り」であり、文化としての芸術性となる。

B. 鯉城通りで形成される軸

新しい広島市の中心軸として平和の軸に直交しており、広島城と市庁舎の間に美術館、病院、県庁舎等の文化施設、公共施設を結びつけている。

この軸は現在、質的水準の向上を目的として整備が進められているが、今後とも、広島城周辺の自然等と景観的にも関連させた環境整備が望まれる場所である。従って、

ここは広島環境性としての彫刻の中心的な設置場所として、広島の特徴を代表する“水と緑”をテーマとして彫刻設置を進めることを検討すべきと考える。

C. 緑で形成される軸

平和大通りと比治山公園で形成される軸は、同時に都心部における緑の軸となっているが、これに交差するもう一つの軸として中央公園芝生広場、ハノーバー庭園、平和記念公園と続く大きな緑の軸がある。

ここでは基本的には緑の持つ親しみやすさ、鑑賞するという意味をになった環境性としての彫刻が対応すると考えられる。

D. 河川で形成される軸

河岸緑地は歩行者のための空間として計画されているが、川に対して開けていることが、その空間の持つ雰囲気や他の市街地内の歩行者空間と非常に広々とした開放感、水面を見ろという“やすらぎ”が感じられる場所である。

一方、河川は市街地を区切っているとともに、様々土地利用を貫通しており、河岸は水面に接しているという共通性以外、多様な地区と接している。従って、水面に起因する“開放感”“やすらぎ”というテーマを持った環境性としての彫刻設置と、その地域の固有の歴史、伝承等を表現する地域性としての彫刻設置が連なってくることが予想される。

(3) 彫刻設置空間の設定

都市像の実現をめざしたまちづくりの中で彫刻のあるまちづくりを推進する際、「彫刻を設置するのにふさわしい場所を選び、その場所に合った優れた彫刻を設置すること」が最も重要である。これまで、彫刻を設置していく都市空間の考え方について、「広島イメージを代表する都市空間」「都中部の充実と周囲への広がり」の項で述べてきたが、これらの考え方に基づいた彫刻設置空間として、都心部の水と緑にかかわる空間を最も重要な彫刻設置空間として出すことができる。従って、彫刻設置を進めるにあたっては、都心部の水と緑にかかわる空間を最重点にしながら、周囲のポイントとなる空間を彫刻設置空間として設定しておき、彫刻のあるまちづくりを効果的に推進するのが望ましい。

具体的には次のような空間を設定することとする。

最も特徴的な空間。彫刻のあるまちづくりを進めるうえで、市民にも、広島を訪れる人々にもアピールし、広島イメージアップが高いと思われる空間として、次のような空間を設置空間として設定する。

これらの空間については、次の節で彫刻設置の考え方において具体的な例を説明する。具体的な彫刻設置位置を抽出しているので、今後、彫刻のあるまちづくり推進のしくみの中で設置位置をもとに、より具体的な実施計画を検討し、実施に移していくことが望ましい。

- ・鯉城通り沿い（紙屋町交差点以北）。都心部の新しい顔となる南北の中心軸であり、彫刻のあるまちづくりのスタートとして最も効果的な空間である。

- ・中央公園芝生広場及びハノーバー庭園。都心部の中心に位置する広いオープンスペースで、彫刻を効果的に設置することによってよりすばらしい空間となる。

- ・比治山芸術公園と京橋川左岸河岸緑地。比治山芸術公園は広島之最も特徴的な空間として整備がはじめられており、また京橋川左岸河岸緑地は比治山芸術公園の登り口に位置することから、これらの空間を一体的に考えた彫刻設置空間とする。

3. 広島典型的な公共空間

広島市の都心部の最も特徴的な空間であり、彫刻設置を優先的にすすめていく空間として、鯉城通り沿い、京橋川左岸河岸緑地、比治山芸術公園、ハノーバー庭園、中央公園芝生広場が考えられるが、それぞれの空間について、都市空間における彫刻設置の留意点に基づき、設置位置の抽出とそこに設置するのがふさわしい彫刻の作品例をケース・スタディーとして実施する。

(1) 鯉城通り沿い

鯉城通り整備基本計画－1980年9月－によると、鯉城通りの計画理念として快適性の高い歩行者空間を創造し、都市部の中心市街地の核となる公園、緑地を結ぶ緑の入口（グリーンゲート）とすることを整備計画の基本方針としている。

しかし、当初の計画のように車線を減らして歩道を広げることは交通上困難となり、現況の幅員の歩道の中に植栽など設置を実施することとなったため、公園的な部分はほとんどなく沿道の大規模建築物の前庭を利用することによって小広場を確保するのが適当である。また、周辺との関連を含めた景観、動線から抽出される設置位置。景観の主要な軸線は南北軸であるが、それに直交した補助的な軸線として東西軸が3本ある。これらの軸線の交差する点が景観から抽出される設置位置となる。

車の動線からは交差点が、視線が集中する彫刻設置可能空間となり、人の動線からは、交差点と小広場、バス停、タクシー乗場、横断歩道等、人の集まり滞留するこ

が設置空間となる。

車からの視線が最も集まるのは、そごうであるが、現在は自転車が雑然と置かれていて、彫刻を設置するにはそれらを修景的に処理する必要がある。車の視線による各ポイントは、交通の安全の視点から、視距の確保に努めねばならない。また、歩道から奥ところは、街路樹、交通標識等でさえぎられ、よく見えない。

人の動線は、紙屋町交差点付近が最も大きく、広島城の側に行くに従って小さくなる。人の視線は、に小広場、バス停、タクシー乗場等の集まる場所、横断歩道、ベンチ等人が立ち止まったり、休憩する場所、あるいは特徴のある構築物〔美術館、広島城等〕があるところによく集まる。

鯉城通りは、歩行者のための空間として人が出合い、憩う場所であるので、動線上で人が滞留すると考えられる位置が抽出される。

前項で触れたように、歩道そのものは拡張されないもので、歩道上に彫刻を設置するのは極めて難しく、歩道に接して沿道の施設に小広場がとれるかどうかを検討すると、広島そごう、第一生命ビル、広島県庁、中国電気通信局、ひろしま美術館、中央テニスコート等の付近が考えられる。

人の活動パターンからみて、快適性を高めるうえで彫刻の設置がふさわしいと思われる場所であり、小広場、バス停、タクシー乗場等、人が通勤、通学する際に、あるいは買物をする際に何げなく視線が触れる場所に、彫刻の設置が考えられる。

以上の検討を総合したものが空間の特性となるが、特に鯉城通り整備計画の基本方針である緑の入口として、モニュメンタルな性格を持った彫刻の設置が望まれるが、その空間が交差点部分を除いて建物前広場であることから、親しみのわく彫刻として、半具象または具象彫刻が考えられる。次、施設の構成について、広場の修景上の改修を行って目立つもの、コンクリート壁と建物の間にあって目立つもの、緑の中にあって目立つもの、美術館と周囲の緑に合うもの。以上の検討から抽出された設置位置については、現在の交通施設(市電の監視塔、自転車置場、横断地下道等)との修景上の調整が難しいこと、設置間隔が近すぎることから、次の4か所を彫刻設置位置として考える。

- ・ 県庁前広場

人が集まり、日常親しまれている場所であるので、親しみのわく具象彫刻の設置を考え心な小広場とする。

- ・ 中国電気通信局角

歩道より一段高い位置にあり、視覚的にも目立つ鑑賞の場所として芸術性の高い具象彫刻の設置を考える。

- ・ 市民病院角

背景の緑を含めて、横断歩道の利用者の視線が集中する空間で、モニュメンタルな緑をテーマとした具象又は半具象彫刻の設置を考える。

- ・ ひろしま美術館

美術館、公園と一体となって、格調高い西欧美術の鑑賞に供する場所として、現代西欧の具象彫刻の設置を考える。

(2) 京橋川左岸河岸緑地

京橋川左岸河岸緑地(東広島橋、鶴見橋間)は比治山芸術公園の入口にあたり、設置位置としてはこの河岸緑地の起終点にあたる両端と中央の屈曲点河川の中心軸に対応したその中間点があげられる。

活動パターンとしても、河岸緑地の起終点及び屈曲部の中央点が導入、滞留の両面で抽出される。さらに、東広島橋と中央の屈曲部の間には、散策の途中に彫刻を設置する場所が考えられる。

中央の屈曲部分は、集合広場として計画されており、河岸ではあるが公園的な小さな産としての特性を持っており、ここで憩う人のための親しみやすさに対応したテーマのものが考えられる。

(3) 比治山芸術公園

比治山芸術公園の基本的な空間構成は、それぞれテーマを持ったゾーンを園路によって結びつけ、全体として芸術公園のテーマである“広島における新しい歴史の創造”“自然の創造”“自然の日常化”“技術の人間化”が実感できる空間を創造することを目標としている。彫刻は、公園内の各ゾーンの持っているテーマや、それを結ぶ園路を移動、対流する人の動線、視線にとって、最もふさわしい場所に設置されなくてはならない。

原則として彫刻は各ゾーン内で動線上の重要な分岐点、結合点及び視線や動線が集中する場所としての広場に設置する。

また、彫刻の設置密度が高くない範囲で、歩行中の視覚的变化をもたせることが望ましいような小広場にも視線を集中する位置に設置する。

現代美術館周囲。現代美術館の建物と樹木とにより囲まれた感じのする密度の高い閉ざされた空間であり、建物や緑を背景とする具象彫刻が考えられる。

・彫刻広場

市街地の展望もでき、樹林に囲まれた静かなテラス状の広場の中に周囲の緑を写すような抽象彫刻が考えられる。

・彫刻の丘

芝生の緩やかなスロープが美術館から下り、樹木の中に溶け込んでおり、点々と大きな樹木が芝生の中に点在しており、多様な種類の彫刻に対応できる空間となる。

(4) 中央公園広場

中央公園芝生広場は、に基町高層住宅が接し、東側は広島城へと続き、南側はファミリー・プール、県立体育館に続いている。西側は護岸が高くなっており、公園からは意識しにくい川に面している。そして、南側が最も交通量が多く、車の動線からは東南および西南のコーナーが景観的にも目立つ位置となる。また、人の動線から見ると、芝生広場の中心部を南北に縦断している園路の起終点付近と、東南の園路上で横断地下道の入口付近が考えられる。まず、公園の機能は2つに大別され、中央部に運動広場があり、その周囲を散策、休憩のためのエリアがとり囲んでいる。そして、中央部を歩道が縦断しているので、運動広場は東西にそれぞれ1か所づつとなり、その周辺も東側と西側に分けられる。

運動広場の中には、機能上彫刻設置は考えられないが、周囲の散策、休憩のエリアについては、東側は現在設置されている彫刻とあわせてストーリーがつけられるような彫刻を考えると、西側は新たに緑の中の彫刻として具象彫刻を中心として設置するエリアとして考えられる。次、構造、外観等の特性と形態。広い平坦な公園であり、これといった空間的に特徴となる点はないので、人の動線、活動パターンによって抽出された点と同じように考え、西側の散策、休憩のエリアの部分は具象彫刻を設置するゾーンとするとともに、それに接する運動広場部分は、解放的な空間と緑を背景にした抽象彫刻を設置するゾーンとする。

4. 広島「彫刻のあるまちづくり」の9点作品

彫刻のあるまちづくりを推進するうえで、どのような彫刻を取得し設置するかということとは、設置空間及び位置の選定とともに非常に重要なポイントである。

都市像の実現をめざし、後世に文化遺産を引き継ぐという目的を達成するためには、彫刻を設置しようとする空間のイメージに合った優れた彫刻を取得し設置していくことが必要であり、原則としてオリジナルな彫刻を取得し固定的に設置することが望ましい。しかも、このような彫刻のあるまちづくりの進め方によって広島のアイデンティティー（独自性、広島らしさ）を創造するとともに、ユニークな風格と文化的雰囲気を持った都市として、国内的にも国際的にも広島を訪れたいくなるような魅力を創出していくことが重要である。

一般的に彫刻の取得方法は、既製の彫刻の購入、創作委託（オーダーメイド）、コンクールが一般的な取得方法であり、また、これらの方法による民間からの寄付の受け入れにより取得する場合もある。このほかの方法としては、シンポジウムの開催による取得やコンペティションによる取得も考えられる。

広島市では彫刻のあるまちづくり推進のうえで、優れた彫刻を取得し固定的に設置することを原則とし、広島のアイデンティティーや個性を創造するために、次のような方法で彫刻を取得するのが最もふさわしいとしていた。

ア．オーダーメイド（創作委託）による取得。広島市の彫刻のあるまちづくりにおける取得方法の基本として考えるべき方法で、彫刻を設置しようとする空間の特性を検討し、国内・国外を問わず広く彫刻家を選定して、その空間にふさわしいオリジナルな彫刻を創作委託する方法である。また、オーダーメイドによる取得は構想から制作、設置までに時間がかかり、単年度で彫刻家の選定から設置まで完了することは困難であることから、2年度をかけて1体設するのが一般的である。しかも、彫刻家の選定にあたっては、専門的な知識や情報が必であり、また、彫刻家との交渉等においても専門的知識を要することから、次のようなめ方が適当である。

イ．コンペティションによる取得

コンペティションは、設置場所を指定し、彫刻についてのテーマ、材質、大きさ、価格等の諸条件を設定したうえで、指名または一般公募により複数の彫刻家の参加を得て競技を行い、その入選作品を取得する方法である。

この方法は、彫刻家の自由な発想を許容するとともに、色々な作品の中から優れた彫刻を選択して取得することができる利点を持っており、この方法により取得する彫刻の設置空間としては、広島イメージを代表する河岸緑地が最もふさわしいと考えられる。

コンペティションの実施にあたっては、時間、費用、進め方などオーダーメイドに、準じて考えることが適当である。

ウ・コンクールによる取得

コンクールは、国内・国外から彫刻作品を募集し、その優秀作品を賞金で買上げて取得する方法である。

コンクールを実施する場合、広島市の大きなイベントとして国内・国外の彫刻家の参加を得た国際的な彫刻コンクールを開催し、コンペティションの実施と合わせて、広島市を彫刻芸術の拠点とすることをめざすことが、都市像の実現を図るうえからも望ましい。この方法により取得する彫刻の設置対象空間としては、広島市の新しい顔として整備される比治山芸術公園が最もふさわしいと考えられる。

コンクールの実施に要する期間は、最低2年を要することから、財団法人広島市文化振興事業団を活用して実施するのが適当である。民間からの寄贈の申し入れについても、彫刻のあるまちづくりへの参加という観点から、オーダーメイド、コンペティション、コンクールなど広島市の取得方法準した方法にしてもらうことを求めた。

広島市は被爆地として都市の「意味」が明確である。1982年に「広島市彫刻のあるまちづくり基本構想」を策定し、この基本構想に基づき、1989年までに9点の設置を行った。

そのうち三点は作品製作を依頼し、二点は設置場所を設定した指名コンペを実施した。四点は寄贈作品をうけいれた。（表2）

表2 システムフロー

彫刻のあるまちづくり基本構想	創作依頼	「テク・テク・テク・テク」 最上寿之 1983年
		1・1・ $\sqrt{2}$ 田中薫 1983年
		マイ・スカイ・ホール 88-5 井上武吉 1985

彫刻のあるまちづくり専門委員会		年
	彫刻コンペティション	
		「大地 0 からのかたち」岡本敦夫 西雅秋 1986 年
		「翔べ未来に向けて」 高橋秀 1989 年
	寄贈彫刻	笛吹き少年 船越保武 1983 「いこいの森」・「姉妹」 林健 1984 「雪椿の乙女」 茂木 1984

1. 第 1 回コンペ

1986 年と 1989 年に、それぞれ一点ずつ指名コンペによる作品決定を実施した。この方法は①特定の設置場所を指定する。②三名程度の制作者を指名する。③各制作者に設置場所をふまえた模型を制作してもらう。④模型を審査し一点を入選とする。⑤その作品を実物大に制作・設置する。というものだ。

広島市初の彫刻コンペ、「彫刻のあるまちづくり」を進めている広島市は、市内を流れる京橋川の河岸緑地に設置する彫刻一体を県出身者など広島ゆかりの彫刻家の制作競技コンペで決めることにし、9 人に制作依頼をした。市は地方自治体が設置場所を特定して制作競技を開くのは、珍しいと話した。「水と緑と文化のまち」を都市像に掲げている市は、57 年に「彫刻のあるまちづくり」に基本構想を策定、制作依頼、コンクール、制作を競技などの方法彫刻を増やすことにし、これまでに制作委託や寄贈で 6 体を比治山公園などに設置した。

今回の制作競技は、初めて、市の特色である河岸の緑地に最も適した作品を設置するため実施する。作品は広島らしくを出してもらうため、参加者は県内在住者か県出身者に限定。9 人は来年 2 月末までに、模型を制作、意図などの説明書をつけて出品、三月の審査で一点だけ決める。作品は 60 年度中に実物の大きさに制作した後設置する。

制作競技の参加者は次の通り。岡本敦夫、片岡亨、杭谷一東、空充秋、高橋秀幸、西雅秋、松本隆司、山口秋生、吉田正朗。

コンペ審査会が 1985 年 3 月 25 日、市役所で開かれ、岡本敦夫と西雅秋の合作の「「大地 0 からのかたち」が選ばれた。近く作者と現地制作の打ち合わせをし、来年春までに完成

させる。費用は約 2,000 万円。「大地 0 からのかたち」は、大地に埋め込まれた直径 12 メートル、幅 1 メートルの鉄板の輪の中から伸びる白みかげ石の円柱は、広島湾に注ぐ川と人々を意味する。その最長のものは平和記念公園に向いており、太陽が沈む時、その影が大地の鉄の輪の中に落ちる。



写真 16. 「大地 0 (ゼロ) からのかたち」

このコンペは、彫刻があるまちづくりを目指す市が本年度、初めて実施した。地元出身の彫刻家たちに制作を依頼した。

以下広島市役所からいただいた資料である。

・「大地 0 (ゼロ) からのかたち」の選定

(1) 京橋川左岸河岸緑地設置彫刻制作競技募集要項の概要など

① 目 的

河岸緑地は、水と緑と文化のまちをめざす広島市の特色である川と市民が交歓できる代表的な歩行者のための空間である。その空間がより市民の日常生活に密着した親しみのわく場所となるために彫刻を設置する。

② 実施方法

広島にゆかりのある複数の彫刻家を指名して模型等を提出してもらい最も優れた作品を審査・決定し、それを制作依頼するという指名コンペ方式とする。

③ 制作与条件

対象地は広島市の街の特徴である河川に接した歩行者のための緑地空間であり、対象地の周辺環境と京橋川河岸緑地の計画趣旨である“水と緑”に合った彫刻とする。

④ 制作条件

- ア 材質は野外設置に耐えるものであること。
- イ 彫刻本体の大きさは設置場所にふさわしいものであること。
- ウ 制作期間は10か月を想定し、このために新規に制作するものとする。
- エ 制作・設置費は総額で2,000万円以内とする。

⑤ 応募作品

定められた期間内に次のものを提出すること。

- ・ 模型（縮尺を明示、50cm程度）
- ・ 完成パース
- ・ 説明書（テーマなどを記入）

⑥ 実施スケジュール

- 昭和59年10月 コンペ実施方針及び指名（依頼）作家決定
- 昭和59年11月 現地調査、模型・完成パース等作成
- 昭和60年2月 応募作品提出
- 昭和60年3月 最終審査（優秀作品決定）

⑦ 審査員（彫刻コンペティション審査会）

区 分	氏 名	現 職 等
美術関係者	朝日 晃	東京都美術館主幹
	大沢 寛三	ひろしま美術館副館長
	弦田平八郎	神奈川県立近代美術館副館長
	本間 正義	埼玉県立近代美術館館長
都市計画	田村 明	法政大学法学部教授
	山木 靖雄	(株)LAT 環境設計事務所代表取締役
マスコミ	橋岡 武	中国新聞社編集局解説委員
市関係者	尾尻 隆之	広島市教育委員長
	河合 護郎	広島市企画調整局長
	柳川 幸雄	広島市都市整備局長

	藤井 崇弘	広島市建設局長
--	-------	---------

⑧ コンペ指名（依頼）作家

氏 名 等	広島市内の設置作品
岡本 敦夫（川崎市）	安佐南区民文化センター壁画「躍動」
片岡 亨（広島市）	安佐南区役所前「和」
杭谷 一東（千葉市）	全日空ホテル前「エスペランツァ」
空 充秋（田無市）	こども文化科学館前「愛のトーテム」他
高橋 秀幸（御調郡向島町）	なし
西 雅秋（埼玉県飯能市）	なし
松本 隆司（広島市）	西区役所前「風雪」
山口 牧生（西宮市）	なし
吉田 正浪（広島市）	安佐北区役所前「少女」

京橋左岸の「大地 0（ゼロ）からのかたち」という彫刻を設置いたしたが、それを含めての作品を募集する際の募集要項につきましては、複数作家による共同作品というものを事務的には想定できなかったということもあって、制作者を1名選出するという表現に確かになっており、しかし、実際に募集をした後には、御指摘のような作家側から共同作品というものが提出された。

これについての取り扱いを検討したが、制作者は複数であるけれども、作品は1点というふうにみなして審査を行った。

ただ、要項の不備については、今後は改善をしたい、このように思った。これは元年第二回6月の定例会の中であった問題であった。

それから、その共同作品の2人のうち1人は、専門委員の親戚ではないかということについて、公平を欠くやり方と思うがどうかという御指摘である。

専門委員会におきまして審査する場合には、作家名を伏せて審査しておりまして、大多数の委員の推薦に基づき共同作品の「大地 0（ゼロ）からのかたち」を選定いたしており。

この選定理由は、記録が残っておるが、理由としては、設置場所にふさわしい遊びや錯覚の要素がある、彫刻の中に人が入っていける、広島市に新しい風景ができて上がる、こういうふうな意見に要約されており。

10 名の指名作家のうちに 1 名が専門委員会の委員のおいであるということを当時の担当者が耳にしたのは、そうした専門委員会の作品が決定された後だというふうに聞いており、作家名を伏せて専門委員の大多数がこの作品を推したという点において、作品選定に結果として問題はなかったと思っておるが、不公平感を招くではないかという点については、御指摘のとおりである。これも元年第二回 6 月の定例会の中で注意点であった。

それから、なぜ現代美術作品を設置するのか。もっと世界的に名の通った作品を設置してはどうかというお考える。設置するかということは、その設置される空間、あるいは位置の選定とともに非常に重要なポイントであるということで、昭和 57 年度に彫刻のあるまちづくりというものを策定いたしまして、設置しようとする空間のイメージに合ったすぐれた彫刻を設置していくという観点から、原則としてオリジナルな彫刻を取得していくことが望ましいということで、現在までこうした原則に従って、いわゆるオーダーメイド・創作委託方式あるいはコンペティションによって競争——設計競技方式で、これによって選ばれた作品を拡大制作するという形で設置して困ったところである。

2. 第二回コンペ 広場中央にモニュメント出現

広島県出身でイタリア在住の彫刻家・高橋秀氏制作の「翔べ未来に向けて」と題するモニュメントは長さ 6.4 メートル、幅 4 メートル、高さ 3.2 メートルが表口広場中央に設置された。作者の高橋氏は、「形を見ると宇宙船のようですが、見る人がそれぞれのイメージを膨らませて欲しいですね。作品の意図は、タイトルそのもので、明日に夢を膨らませおらかにいきましょうよということです。広島陸の玄関を出入りするがそういう思いを感じてくれ、広島を出発点により多くの人々に伝われば、作家としての大きな喜びです」と話していらっしゃっていた。



写真 17.「翔べ未来に向けて」

(2) 彫刻のあるまちづくり専門委員会審査結果

① 日 時：昭和 62 年 6 月 10 日（水）14:00～16:00

② 出席者

区 分	氏 名	現 職 等
委 員	大沢 寛三	ひろしま美術館副館長
	橋岡 武	中国新聞社編集局編集委員
	石橋 正行	広島市企画調整局長
	川村 尋男	広島市都市整備局長
	朝日 晃	広島市現代美術館開設準備事務局長
特別委員	本間 正義	埼玉県立近代美術館館長
	三木 多聞	国立国際美術館館長

③ 内 容

ア 彫刻模型審査

始めに 10 分程度各委員が自由な角度から彫刻模型を鑑賞し、引き続き彫刻模型の形状、材質、水の取り入れ方、周辺との調和等について、各委員が意見を交換しながら審査を行った。

欠席した委員については、事前に意見を聴取しており、事務局から説明した。選定された「翔べ未来に向けて」に対する意見は次のとおり。

- ・都会的な感じで駅前彫刻として無難と思う。また、形状が面白いので噴水装置などいろいろ工夫してあるけれども、そんなに凝る必要はなく、むしろ簡単にしたほうが良いのではないか。

- ・モダンで面白いと思う。ただ、噴水装置、ステンレスの鏡面などのメンテナンスについては作家との契約時に十分詰めておく必要がある。

- ・将来的にメンテナンスの問題もあるが、夜の演出という点では買えると思う。

- ・新鮮であり、ステンレスで周辺が写し込まれることや、噴水が下を向いていることなどは面白く、3作品の中では一番目を引く。

- ・彫刻の設置場所である8m×6mの中でのバランスというのではなく、広場全体の中での高さ、広さのバランス、彫刻周辺のペイブメント、バスベイの上屋、照明等との色との調和について考慮する必要がある。作品的にはこの作品がマッチすると思う。なお、周辺を写し込むので駅前広場整備の植栽計でもう少し緑のアクセントを付けたほうがよい。

- ・広島は鉄の文化を育んできた歴史があり、そういう意味では面白いと思う。ただ、全体がステンレスの鏡面仕上げであり、メカニックもあって、メンテナンスのマニュアルが必要だと思う。

- ・ステンレス部分の楕円状の形が面白い。水のカーテン、夜の照明についても工夫しており、夜のドラマがあって面白いと思う。

- ・形の美しさがあり、噴水・光は感じがいい。この作品はどこの街のどこの場所に置いてもいいと思う。ただ、光の反射が気になる。

イ 結 果

委員会の全員一致で「翔べ未来に向けて」に決定した。

なお、昭和62年6月20日の広島市議会において募集要項の金額に対して次の質問を行っている。

駅前のモニュメント、高橋秀が作った「翔べ未来に向けて」というのが、ことしの3月20日ごろが、制作競技募集要項というのが4,000万円以下と書いてある。ところが、支払いを聞いてみると、6,500万円支払ってる。制作競技募集要項というのは、この場合3人でやってるなんだけど、高橋秀を周旋をしたのは一一推薦をしたのは、朝日晃だというふうに言われた。

朝日君が彼が推薦した高橋秀が競争の結果、その金額は、この募集要項では4,000万円になってるけど。4,000万円のものをなぜ6,500万円払う。少しは理由があるかなと思うけど、そういう増額の理由はなぜそういうことをしたのか明確にしてもらいたい。

また、高橋秀はイタリアにおり、金の受取人、これはだれなのか。それから、支払い日。それから、制作競技募集要項、これはだれが作ったのか。

それから、実際この作品は1年おくれて納入されて、これは違約金を取った。続いて、京橋川の左岸に彫刻を設置して。これは、2,000万円かけて設置した、この要項をみると、制作者を1人選出というふうに規定されておる。ところが、実際には2人を選んだ。これも違反じゃないか。しかも、その2人の1人が朝日晃君のおいになる。こういう公の審査をするのに、そういう身内の者が審査委員になっているというのも、公平を欠ぐやり方だというふうに思う、こういうことをすると、作家の作品をつくるという自由というのは阻害される。最後は、厚生年金会館の裏の作品で、これはもう新聞で大きく出ており。5,000万円かけて井上武吉に頼んだという、大和生命ビルの前が1,300万で、東京都立美術館の前は2,000万円、広島市のが5,000万円というのは、余りにも高いんじゃないか。

広島のコンペはただ二回だ、1987年に一応の終了をみているようだ。残念な結果、広島「彫刻のあるまちづくり」が終了した。

公共空間における彫刻作品のあり方は、今後も、問われ続けられる。

以下 9 点作品の写真

「テク・テク・テク・テク」 最上寿之 1983 年



写真 18

1・1・ $\sqrt{2}$ 田中薫 1983 年



写真 19

マイ・スカイ・ホール 88-5 井上武吉 1985 年



写真 20

6. 寄贈彫刻 笛吹き少年 船越保武 1983



写真 21

「いこいの森」林健 1984



写真 22

「姉妹」



写真 23

「雪椿の乙女」 茂木 1984



写真 24

以上「彫刻のあるまちづくり」は、鯉城通り、また京橋川緑地、中央公園など、それぞれの空間を生かした彫刻を設置した。最後に都市のなかに設置される彫刻の場を考えみると次のことが思った休憩の場、人々を見える(よく通る)場所に設置すべき公共的な場所、市内の公園などである。

おわりに

今回、広島に点在する碑やモニュメントに限って、「平和」を伝える方法を論じたが、日本では長崎や沖縄にも、同様に数多くの戦争被害や平和祈念に関する碑やモニュメントが数多く設置されている。

戦争被害や平和に関する碑やモニュメントは、その場で悲惨な出来事があったことを示しているものである。碑やモニュメントが表現している主張はともかく、まず、その歴史的な惨禍を伝えるうえでは、碑やモニュメントを身近な場所に設置することは意味があると考えられる。このように考えると、ヒロシマに設置されている碑やモニュメントは、平和記念都市ヒロシマを飾っているものとして聞こえるだろう。だが、そうではなく、碑やモニュメントはそれぞれ、平和への思いを込めて、あるいは、被爆によって亡くなった人への鎮魂を込めて、制作されたものである。ただの飾りではない。この点を踏まえ、現存している平和祈念施設や祈念物をどのように活用し、平和を伝える手段とするか、そして歴史的な出来事を、どのように風化させることなく捉えていくかは、時代によって、様々な方法を模索していかなければならない。

今日では、公共彫刻の目的がそれからはるかに変化していることは明らかである。英雄や出来事を記念することは稀だし、栄達とか人生の成功を象徴することもほとんどない。かわりに、その役割はそれが置かれる環境を美的に強調することになってきている。公共彫刻を日々の環境のなかの一要素として体験するような人々の生活の質の向上のために、それが視覚的また経験のうえで貢献することが求められているのだ。しかしながら、すくなくとも我々がいま生きている世界の、それがいまだに象徴であり表現である、という意味はある。人生の成功や栄達を記念するかわりに、今日の公共彫刻は共同体の象徴ないしは地域社会のイメージとしてより機能するような傾向にある。その目的はしばしば、文化的なものであると同時に商業的なものでもある。「彫刻のあるまちづくり」の件からみると広島美術館副館長作品購入で収賄する、そのことから、広島のコペはただ二回だ、1987年に一応の終了をみているようだ。残念な結果、広島「彫刻のあるまちづくり」が終了した。

公共空間における彫刻作品のあり方は、今後も、問われ続けられると思われる。

注

¹ 人物、時代、事件などを歴史的、社会的、文化的に永久に記念するために作られたものを指す。記念碑はその性格から、(1)埋葬の地に作られる墓碑、(2)特定の人物の記念、頌徳のためのもの、(3)歴史上の事件の記念のためのもの、に大別される。

²モニュメント (Monument) は、記念碑、記念建物、記念館、銅像、慰霊碑、忠魂碑、忠霊塔など。

³ パブリックアート (public art) とは、美術館やギャラリー以外の広場や道路や公園など公共的な空間 (パブリックスペース) に設置される芸術作品を指す。設置される空間の環境的特性や周辺との関係性において、空間の魅力を高める役割をになう、公共空間を構成する一つの要素と位置づけられる。記念碑的なものより、象徴的なもの、コンセプチュアルなもの、建築の壁画、音、風、光などを利用したものも含まれる。

⁴ 広島市(原爆平和)HP :

<http://www.city.hiroshima.lg.jp/www/contents/00000000000000/1111638957650/index.html>

被爆当時、広島には約 35 万人の市民や軍人がいたと考えられている。原爆によって死亡した人の数については、放射線による急性障害が一応おさまった、昭和 20 年 (1945 年) 12 月末までに、約 14 万人が死亡したと推計されている。

⁵竹田直樹 『日本の彫刻設置事業 モニュメントとパブリックアート』公人の友社、1997

⁶山崎盛司「緑と彫刻のまちづくり・宇部市」松下圭一・森啓編『文化行政—行政の自己革新』学陽書房、1981 年：上田芳江「花と緑と彫刻」田村明・森啓編『文化行政とまちづくり』時事通信社、1983 年：上田芳江「人づくりの大役担った彫刻」『第 8 回現代日本彫刻展』1979 年

⁷弦田平八郎「宇部野外彫刻展の 16 年の歩み」『第 7 回現代日本彫刻展』1977 年

⁸向井良吉「彫刻都市への試み—宇部市野外彫刻展」『芸術新潮』新潮社、1961 年

⁹岩城次郎「企画立案から審査まで」『第 1 回全国彫刻コンクール応募展』1963 年

¹⁰向井、前掲書

¹¹竹田直樹『日本の彫刻設置事業』公人の友社、1997 年。なお、この点に関して「市民」の利益は満たされているかということ、竹田が指摘しているように、宇部方式では作品が

設置場所を想定されずに制作されるため、彫刻と設置場所との関係性が不十分であること、作品選定プロセスに市民が関わる仕組みがないことなどから、必ずしも市民の利害に一致しているとは言えない。

¹²岸田裕之『広島県の歴史』株式会社 山川出版者 1999 年

¹³ General Headquarters（総司令部、総本部）の略。日本史上の用語としては、連合国最高司令官総司令部、連合軍総司令部を意味する。1945 年にアメリカ政府が設置した対日占領政策の実施機関で東京に設置された管理機関。1952 年にサンフランシスコ講和条約発効とともに廃止されるまで日本を支配していた。

¹⁴ ダグラス・マッカーサー（Douglas MacArthur、1880 年 1 月 26 日 - 1964 年 4 月 5 日）は、アメリカ陸軍の将軍（元帥）で、GHQ 最高司令官であり、名誉勲章の受章者である。

¹⁵浜井 信三（はまい しんぞう、1905 年 5 月 28 日 - 1968 年 2 月 26 日）は、日本の政治家、広島市長（在任期間…1947 年 - 1955 年、1959 年 - 1967 年。渡辺忠雄市長を一期挟み通算四期市長を務めた）。濱井信三とも（胸像の銘文では濱井）。一貫して核兵器の全面禁止を訴え、広島の父、または原爆市長と称される。

¹⁶慰霊碑とは、事故や戦争、災害などで亡くなった人や動物の霊を慰めるために建立された石碑。霊を慰めるためや、二度とそのようなことがないように戒めることや、警告といった意味をもち、それに沿った文言が碑文（ひぶん、ひもん）として刻まれる。死者発生の原因が災害である場合は、しばしば災害記念碑を兼ねる。

¹⁷『広島のいしぶみはみつめる第 1 集』

参考文献

宇吹暁，平和冊子 NO．8 『広島平和記念式典の歩み』，財団法人広島平和文化センター，1992

西尾隆昌，『広島のいしぶみはみつめる第1集』，西尾隆昌，1982

西尾隆昌，『広島のいしぶみはみつめる第2集』，西尾隆昌，2000年

小堺吉光，『ヒロシマ読本』，財団法人広島文化センター，2005年

広島県歴史教育者協議会，『原爆モニュメント物語』，平和文化，1984年．「原爆犠牲ヒロシマの碑」維持委員会

『原爆瓦は語りつづける原爆犠牲・ヒロシマの碑建設の記録』，広島平和教育研究所出版部，1983年

世界の子どもの平和像を広島につくる会『せこへい平和をつくる子どもたち』，部落問題研究所，2002年

中国新聞ヒロシマ50年取材班，『検証ヒロシマ1945－1995』，中国新聞社，1995年

新聞記事

「忘れ去られた平和の鐘」 1973 年 9 月 2 日「中国新聞」朝刊
1999 年 8 月 1 日「中国新聞」朝刊

昭和 60 年 3 月 26 日 「中国新聞」朝刊

昭和 59 年 12 月 4 日「中国新聞」朝刊

「嵐の中の母子像」1961 年 8 月 3 日「中国新聞」夕刊

「嵐の中の母子像除幕」1960 年 8 月 6 日「中国新聞」朝刊

「ひろしま国世界の中のヒロシマ」2007 年 11 月 13 日「中国新聞」朝刊

「許しと和解誓う平和都市」2007 年 7 月 13 日「中国新聞」朝刊

「祈り一本につなぐ平和公園設計」 2008 年 8 月 4 日「中国新聞」朝刊

「ヒロシマの記録平和都市法 50 年」1999 年 6 月 22 日「中国新聞」朝刊「核廃絶へ照らす」2006 年 12 月 19 日「中国新聞」朝刊

「ヒロシマを歩いてみよう原爆と戦争のあしあとをたずねて」1998 年, 生協ヒロシマ碑めぐりガイド

「被爆者運動 50 年全国団体アンケート」2006 年 8 月 1 日「中国新聞」朝刊

パブリック・アート入門 自治体の彫刻設置を考える 公人の友社 1993. 10

田辺光彰 パブリック・アート 21 世紀 公人の友社 1995. 3.

岡本芳枝『竹田直樹』(広島アートプロジェクト実行委員会『旧中工場アートプロジェクト』)
2007 年

石崎奈美ほか『阪神淡路大震災を契機とした公園緑地における野外彫刻設置の変容に関する研究』ランドスケープ研究 69(5), 383-388 頁, 2006 年

竹田直樹 『日本の彫刻設置事業 モニュメントとパブリックアート』公人の友社、1997
『せこへい 平和をつくる子供たち』2002 年

岸田裕之『広島県の歴史』1999 年

西澤泰彦「満州」都市物語 河出書房新社 1996 年

西澤泰彦『日本植民地建築論』名古屋大学出版会 2008 年

佐藤忠良・舟越保武 『彫刻家の眼』 講談社、1985 年

佐藤忠良 『佐藤忠良のクロッキー入門』 求龍堂、1983 年

飯田善国 『見えない彫刻』 小沢書店、1982 年

飯田善国 『震える空間』小沢書店、1988 年

堀内正和 『堀内正和の彫、河出書房新社、昭 6 3、1 冊
『原爆被災資料総目録第 1 集』 原爆被災資料広島研究会 1969 年
『写真記録 ヒロシマ 25 年』朝日新聞社（刊） 佐々木雄一郎 1970 年
『原爆の碑をたずねて』 原水爆禁止広島県協議会 1974 年

高辻尚文『広島市・平和のモニュメントの分布図』 1975 年

宇吹暁『慰霊碑の思想』 1975 年

『慰霊碑めぐり』 民主青年同盟〔広島〕県委員会 1975 年

黒川万千代『原爆の碑ー広島のことろ』 新日本出版社（刊）1982 年

『慰霊碑・広島』 原爆資料保存会 1977

『ヒロシマの旅ー碑めぐりガイドブック』 広島県歴史教育者協議会ほか 1983

『原爆モニュメント物語』 広島県歴史教育者協議会 1984

『なぜいまもつづく広島記念碑』池上利秋・武田寛ほか編 1987

竹田直樹著「公的空間の彫刻作品の作品内容の在り方」（デザイン学研究97 号、1993）

公共空間における彫刻作品に対するイメージ調査 有 田 信 夫 近畿大学九州短期大
学研究紀要 第23 号 平成 5 年12 月

写真図表リスト

- 写真 1. 平和の鐘 2010 年 11 月 23 日
- 写真 2. 原爆の子の像 2010 年 11 月 23 日
- 写真 3. 塔の内部 2012 年 08 月 10 日
- 写真 4. 嵐の中の母子像 2012 年 08 月 10 日
- 写真 5. 平和の像 「若葉」 2012 年 08 月 10 日
- 写真 6. 原爆犠牲「ヒロシマの碑」 2010 年 11 月 23 日
- 写真 7. 朝の像 2010 年 12 月 10 日
- 写真 8. 「友愛」 2010 年 11 月 23 日
- 写真 9. 「世界の子供の平和像」 2010 年 11 月 23 日
- 写真 10. 動員学徒慰霊塔 2012 年 08 月 10 日
- 写真 11. 原爆犠牲国民学校教師と子供の碑 2012 年 08 月 10 日
- 写真 12. 平和乃観音像 2010 年 11 月 23 日
- 写真 13. 「平和の鐘」 2010 年 11 月 23 日
- 写真 14. 「地球平和監視時計」 2010 年 11 月 23 日
- 写真 15. 原爆死没者慰霊碑（広島平和都市記念碑） 2011 年 10 月 23 日
- 写真 16. 「大地 0（ゼロ）からのかたち」 2011 年 10 月 23 日
- 写真 17. 「翔べ未来に向けて」 2011 年 10 月 23 日
- 写真 18. 「テク・テク・テク・テク」 2011 年 10 月 23 日
- 写真 19. $1 \cdot 1 \cdot \sqrt{2}$ 2011 年 10 月 23 日
- 写真 20. マイ・スカイ・ホール 88-5 2011 年 10 月 23 日
- 写真 21. 笛吹き少年 2011 年 10 月 23 日
- 写真 22. 「いこいの森」 2011 年 10 月 23 日
- 写真 23. 「姉妹」 2011 年 10 月 23 日
- 写真 24. 「雪椿の乙女」 茂木 2011 年 10 月 23 日
